保存用

わいふ

考える主婦の投稿誌

147

特集 女と政治

書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは　発見するでしょう
同じことを
考えていたひとが
あそこにも　ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは　もう
一人ぼっちではない
ということを

投稿規定

予約購読者はどなたでも投稿できます。

(一) 随筆、随想。テーマ自由
千二百字まで。

(二) わいふティーチイン
特集テーマ原稿
千二百字まで

(三) おしゃべり。五百字まで

以上、原則としてすべて掲載しますが、紙面の都合上多少選択することがあります。

(四) 持ちこみ原稿。形式、内容、長さ自由。ただし掲載は編集部で協議の上決定します。

わいふ・147号／目 次

特 女と政治 集

〈座 談 会〉 **なぜ女に投票するのか** ……20
駒野陽子＊木村徳栄＊橋本宏子＊編集部

〈特集投稿〉 ……30
岩本千鶴子＊小沢磯子＊樽角輝子＊谷崎正子

〈マンガ絵巻〉 **女の百年戦争**／婦人参政権獲得史……30～39

「君が代通信／その2」……亀山利子 40

■シリーズ**「生きています④／新谷広美さん」** …… 2

■ **“母さん地獄へ行け„ 報道に思う** ……鈴木由美子 4

■投稿随筆／**たていと・よこいと** …… 8
戸倉恵美子＊北川洋子＊蜂谷まさよ＊まつはしもとこ＊上沼博子

■**わいふティーチ・イン**……12
岩田真砂子＊樋口弘美＊沼田陽子＊木村澄子

■**お能拝見③**……和田好子 44

■**「太平洋の旅」** ……鈴木俊子 51

■**アンケートの依頼**……18

■**情報コーナー** ……50

■**おしゃべり** ……55

表 紙・橋本 治
中 表 紙・平島春男

生きています

結婚改姓に反対する
○新谷広美さん

白のサマーハットに白のワンピース。涼しげな姿は、とても妊娠九ヶ月とは思えない。

〝育児休暇のおかげでこどもが生めます〟

という広美さんは、公立中学の先生、そして「わいふ」会員の一人である。

同姓か、別姓か、外国の例

夫婦同姓はキリスト教的婚姻観によるものでヨーロッパに多い。日本は明治維新のとき、民法典の手本をヨーロッパに求めたので、そのまま今日に至っている。中国は伝統的に別姓、ソ連は別姓も選択もできる。夫の姓と妻の姓を重ね合わせる結合姓は東欧社会主義国に多く、イタリアも七五年の家族法改正で結合姓を採用した。西ドイツでは夫の姓を名乗るようになっているのを、結合姓と別姓に改正する法案を審議中である。

〝私がいっしょにいれば彼が進歩すると思うし、彼は彼で、自分が私を助けていると思っているの〟

広美さんのおつれあいは、何かとよい相棒だった高校時代のクラスメート。

大学後半から同棲、ホントは早く結婚したかったんだけど、彼の両親が猛反対、あんまり反対するので〝何が何んでも結婚してみせるゾ〟と勇ましく憲法二四条を楯に結婚へとまっしぐら。

その時までは自分の姓が変わるということは、大して気にとめていなかったのに、婚姻届を出すギリギリになって、思いがけない苦痛を感じ始め、夫の姓になった翌日から後悔しはじめたそうだ。

働くのも平等、家事も平等の二人のくらしは、同棲時代と少しも変らないのに、夫の姓になったとたん、自分の人格が抹殺されてしまったように感じ始めたのである。

○○さんの奥さん、○○氏の妻、という目でしか女を見ない世間。

〝嫁にもらったんだから、あなたはこっちの人間〟と言われて、いくら夫婦だけの新戸籍を作っても、相手の「家」に嫁入りしたとしかとられない現実が、厳然として存在していることに気が付いた。

新憲法の下、個人尊重、男女同権がうたわれ、結婚のとき、「夫、妻、どちらの姓でも選べる」（民法七五〇条）となって三十年。しかし今でも、当然のこととして夫の姓になる妻がほとんどなのだ。

結婚、離婚、再婚と、なぜ女ばかりがコロコロと姓を変えねばならぬのか……

不満をグチにしてもグチにしか終らない。女が生き生きくらせる社会にするために、不満のもとを解決しなければ……

「結婚しても旧姓をなのりたい人集まろう」広美さんが、おそるおそる呼びかけたのは、三年前。

なんと、同じ思いの女が、おどろくほど沢山いた。

改姓によって、仕事の上で不利益を蒙る例、女のプライバシーだけが改姓によって露骨に出るのはイヤ等々……

そして共通する最大の理由は、改姓によって、相手の「家」にからめとられてしまう事実であった。

「結婚改姓に反対する会」はこうして集まった女たちで発足した。

女の男と真に対等な結びつきを願って、「家」の象徴である姓を、個人のものにしようと、「夫婦同姓を義務づける民法七五〇条の改正」を目標とした。

そしていま、「結婚後もそれぞれ別の姓を称する」こともできるようにと、国会に一万通の請願書を提出する運動にのりだしたのである。

〝結婚改姓に反対するなんてナンセンス！結婚制度そのものを否定すればいい〟という急進派の声もある。

〝そんなこと言っても…〟と首を傾ける広美さんは、まったくあどけない童女の表情である。

そこまで徹底して現実を改革する勇気も、力量もない場合、ひっこんで愚痴っているのがこれまでの女たちだった。

あどけない少女のような広美さんは、現実の生活の中からそこをとびこえる。

〝育児休暇のおかげでこどもが生める〟と明るく云ってのけるのも、利用できるものは利用して、自分たちの現実を築き上げようとする逞しい若さなのかもしれない。

（林　慶子）

「母さん地獄へ行け」報道に思う

鈴木由美子

これほど新聞が一人の女性を追いつめることができたのは社会通念に支えられている自信があったからだ。

父親が九才と六才の男の子とともに団地の屋上から飛び降り、三人とも死亡するという事件がこの四月にあった。この家の母親は、生活苦からアルサロに働きに出ているうちに男性客と親しくなり昨年九月に家出していた。子供の世話ができる住込みの職に変った父親は、事件の半月前に「疲れた」と書置きして子供二人を連れ、行方不明になっていたとか。子供たちが書いた遺書が見つかり、「おかあさんはじごくへいけ」とあったそうだ。

わが家で購読している毎日新聞は、この事件を非常に大きく取り扱った。当日夕刊の『父子三人飛降り心中』の記事のあと、翌朝は社会面トップに『母へ〝恨みの遺書〟哀れ』という見出しで、子供が手帳に書いたじごくへいけのくだりと天国・地獄の絵のコピーを最上段に掲げて事件の解説をし、社会部ホットラインに読者からのこの記事への意見と感想を求めている。その日の夕刊もトップで、『私なら……子のために強く』とホットラインに寄せられた声を報告した。そして次の朝『うつ向きに泣きじゃくる、父子三人心中の母、通夜に姿みせる』と小さい記事ながらも詳しく追いかけている。

ホットラインの設けられた日、オムツの入った洗濯機のうなるそばで、私も何度かダイヤルを回してみたがいつも話し中であった。この事件の報道姿勢についていろいろ疑問があったので、文句を言いたかったのである。期待しながら夕刊の報告記事を開いてみると、がんばってきた父子・母子家庭の体験談、母の悪口を子に言い、巻添えにした父親の弱さや、家出した母親の無責任への非難、水商売バイトのいましめ、福祉と里親制度の提案などが載っていた。もっともなことが多いが、新聞記事

そのものへの批判は一つも見あたらない。その種の意見はなかったのか、それとも載せなかったのだろうか。

私が言おうとした疑問の一つは、「心中」なる言葉を親と幼い子の事件になぜ使うのか、ということである。成人男女の情死のように両者に主体的な意志があるときと、心も体も抵抗力の弱い子供を親の意志で死へ引きずりこむ場合とを、同じ言葉でくくってしまうのはおかしい。記事に無理心中という言葉さえ使われなかったのは、子供たちが遺書を残したからだろうが、大人がつくりだした異常な状況下で形成された意志でしかないし、小児だけの自殺とちがって、最後の一瞬には「Mちゃんを約二十八メートル下の地面に突き落としたあと、自分もTちゃんを抱いて飛び降りたらしい」と父親の腕力がものをいっている。心中というあいまいな表現で、二人の子供の命が奪われた殺人行為の重さが吹きとんでしまいそうだ。

短絡的な発想と言われそうだが、この種のあいまいさに慣れてしまうと、自分の命を断てば人を殺してもいいという思想に抵抗できなくなりそうで心配なのだ。浅沼稲次郎氏が刺殺される瞬間の写真を見たのは小学生の頃だったが、自殺した山口少年はある種の人々には英雄となった。暴力肯定の思想、テロの思想だ。こういうものに新聞が立向かう力を弱めはしないだろうか。

さらに、親は子より身分が上、という考え方。他人を殺すより自分の親を殺すほうが罪は重い、という尊属殺人罪がつい昨日までまかり通っていた風土だから、裏返して、自分の子を殺すのは他人の子を殺すより罪が軽い、という考えがいきわたっていても不思議ではない。新聞がこれに同調してしまう危険も感じる。

もちろんこれらの記事でも、巻添えはよくないとされているし、父親の弱さも指摘されているが、どうも同情的な甘さが目立つのだ。

また、記事は涙・涙で埋められている。近所の人は残されたランドセルを見ては泣き、長男の書いた張り紙を見つけたといっては涙をさそわれる。刑事課長氏は「子供たちは泣きながらこの遺書を書いたんだろう」と語る。見出しも「哀れ」「読者も泣いた」「子に罪なく」という調子だ。私にもこの子たちの死がいたましいことに変わりはない。だが、この涙の大洪水に流し去られる何ものかが気にかかる。

私の次の疑問は、二人の子供が書いた「じごくへいけ」の遺書をこれほど大きく、感情移入しなが

らことこまかに報道する社会的意味があるのかどうかということ。おそらく、淋しさの中で父親から、ぐちや母親の悪口ばかり聞かされ、父親の家事・育児能力の低さに悩まされたあげく、放浪の旅に連れ出された子供がこの程度のことを書くのは何ら異常だと思えない。子供時代を思い起こせば、たいていの人は「お母さんなんか死んじまえ」くらいのことを言ったり書いたりしたことがあるのではないだろうか。

ひょっとしたら、この記事を書いた記者氏は心やさしすぎて、幼い子の死に平静でいられなかったのかも知れない。けれども子供の言動のひとかけらを大きく取りあげて同情を誘う方法が、子供を大切にすることになるのかどうか。つい疑ぐり深くなるのは、大人が子供の言葉を自分の主張のたまよけに使う例が、世の中に満ち満ちていると感じるからだ。

今では、死んだ父親が責任を負うことはできず、子供たちも物言うことができない。新聞が「心中」で父親を免罪し、子供の遺書を大写しながら母親に視線を向けることは、たった一人生残ったこの母親の肩の上に、三人の死の道義的責任まで含めた非難の重圧をかける結果をもたらす。実名で書かれたこの女性は、これから何度も世間から石を投げつけられることだろう。あの人が例の地獄へ行けと言われた鬼のような母親だよ、あの人のせいで子供たちが死んだんだよ、というふうに。これが、この報道の最大の問題点だと私は思う。

この女性が実際にしたことは、家出した、ただそれだけである。子供から突然離れたわけだが、乳飲み児ではなく、服を着たりパンを買いに行ったりできる九才と六才の子だ。コインロッカーに入れたり、遠くの地に置き去りにしたりはしていない。子供だけ残したのでもなく父という保護者がついていた。記事に「子供を捨てた母親」という表現があるが、犯罪としての子捨てといえる内容は見当らない。家出の影響を受けた子供たちと、直接世話になった人にだけ、彼女が責めを負えばいいプライベートなことだ。何も家出を礼賛する気はないけれども、この女性の行為が、過不足なくもっと冷静に語られることは必要だ。彼女が差別されやすい社会階層と職業と性に属する人だから、よけいそれが大切だと思うのである。

そして、彼女が愛人を持ったということは、姦通罪のない今日、夫との関係だけで問題にされる私的な事柄だ。この夫が、夫婦の愛情を維持するために努力をはらう男性であったか、彼女を傷つける行為をする人でなかったかなども他人にはわからないのだから、彼女が悪いということは誰にもでき

ない。したがって、毎日新聞に「男ができた妻」などと下品な表現で侮蔑されるいわれはないと思う。

夫がこんな事件を起こさなかったら、この女性は相談相手を見つけるかして、そのうちに身辺をすっきりさせていたかも知れない。彼女の再出発は、夫と、愛人と、あるいは独身のどれで始まったか、子供と一緒に暮らしたかどうか、その形は想像できない。思いきった行動ののち、世の中の網にからめとられて、投げやりになったり卑屈になったりしたかも知れないが、自分で生き方を決めうる女性として成長していく可能性も開かれていた。子供たちとの関係も、新しい次元で結び直す日があり得ただろう。ただ、この事件が起こった時点では、彼女は再出発前の動乱期にいた。人生が揺れ動くときの常として優等性的な姿で生きてはいなかったというだけのことだ。自分の子供たちを失ない、記者や読者などよりずっと悲しみの深い彼女は、自分も遠因を作っていたために怒ることができない。それゆえに、新聞がかき立てた非難の大きさがますます残酷なものに思えてくる。

これほど新聞が一人の女性を追いつめることができたのは、社会通念に支えられている自信があったからだと思う。その通念とは、子どものいる女性は母親として生きることをすべてに優先させるべきだ、恋する女とか社会人とかの面で母親の部分を侵害してはならないということ、それと、子供は母親のそばにいることが絶対にしあわせなのだというものだ。これを否定されては男中心の社会は成り立たない。この女性は愛人を持ち、子供から離れるという最大のタブーを犯していたからたたかれたようだ。

新聞は婦人解放の旗をかかげよ、などと言う気はさらさらないが、この種の通念に頼って記事を書かれると困った問題が出てくる。母親は子どもにとって絶対だと強調すれば、離婚後父親が子供を育てるという生き方を選んだ女性や、母親と暮らしていない子供を差別することにつながる。子から離れた母を責めてばかりいると、まともな人間関係を結んでいない両親に育てられたり、生きがいを持てない母とべったり暮らしたりしているために子供が受けている大きな被害が見失なわれる。記者は、依って立つ地点にもっとメスを入れてほしい。

この毎日新聞の報道は、悲惨な事件をもとに現代の親子の問題を広く世に問いかけるという形でなされたが、情緒に訴え、保守的な道徳や通念を動員して、無名の一女性を不当に裁いてしまった。許されないことだと思う。

——カット　林——

洗濯もの

山梨県
戸泉恵美子

暖かい太陽の匂い！　洗剤のほのかな匂い！　これは多分誰しもが干し上った洗濯物から感じるしあわせの匂いではなかろうか。

我が家は夫婦に子どもの三人家族。洗濯は好きで天気さえよければ、毎朝の仕事として洗い、色どりよく感じよく干し、青空高くひるがえる洗濯物に、主婦の満足感を味わっていたものだ。洗濯をろくにしない主婦なんて、主婦の風上にもおけない、なんて昔は思っていた。

所が近年、洗濯を毎日しなくなった。障害児の仕事を十年程前から始め、此の頃は毎日の勤めになってしまったから、その回数は減ってしまった。

しかしである、洗濯はやっぱり楽しい。五日も洗濯をしないと、パンツは二十枚位並ぶ。小さいパンツから順に大きいパンツへと色どりも考えて干す。此の頃の女の子のパンツは色どりも型もすてきになった。道路に近い方へはかわいいパンツを。パンティストッキングも黒・こげ茶・はだ色・ねずと考えて干す。ブルーのハンガーにはスリップや白いブラウスを、赤いハンガーにはパジャマや主人の下着を、などなど考えながら干すのはいとも楽しい。勿論考えながらといっても、手間ひまかかるわけではない。

以前住んでいた所の近くに、四階建のアパートが沢山並んでいた。バスを待ちながら眺めると、ベランダはにぎやかだ。花の鉢があり、ミニ風呂場があり、天気がいいとふとんが並び、洗濯物が並ぶ。洗濯物が私好みに干してあると嬉しくなる。そこの主婦がなんとなく好きになれそうな感じがする。

仕事のため県下くまなく家庭訪問するわけだが、裏街の黒い板塀の向うに、山間僻地の農家の軒先に、私好みに干されている洗濯物を見かけると、まるで旧知の友に出逢ったような喜びを感ずるのである。

母親である私

杉並区
北川　洋子

末の子供が来春は中学生になる。子供を置いて働くべきか否かという論争は久しいが、私自身では意見としてよりも先ず感情として子供を一人家に置く事が出来ずに子供との触れ合いを生活の中心に据えて生活して来た。

しかし中学生ともなれば話は別になる。来春には私も社会の一年生として就職する積りなのだ。レジャー活用とか自分の為というのでは私にとって根拠が薄い。私は何よりも子供を第一に考える古いタイプなので、子供への愛情を接触という事から、しっかりと社会に根を張って生きる女性の姿を見せる、子供が後髪をひかれる事なく安心して巣立てる逞しさを身につけるという事へと切り換えるべきだと考えているのだ。しかし私は晩婚だったので来春には四十三を数える。子供の中学受験以上に難しそうな私の就職を前にして毎日自分なりの職業訓練に余念がない。こんなに丈夫で真面目な私を使わなきゃ損だぞという気で張り切っている。しかし実際の処人の話によればやはり中年女性の就職はむずかしいらしい。社会の仕組みがそうなって

いるのだそうだ。

そうならば私の受けた損害は娘には蒙らせてはならぬ。ここで又もやとめどない母性愛の発露と相なって私は娘にも息子にも男女差別を悪とする教育を施す事に夢中になる。

「男の子も女の子も持てる能力の発揮を抑制される事なくのびのびと自由に育て。互にいたわり合い相手の立場を尊敬する事」これが私の家族教育の要の一つである。こうして男女差別を不思議だと感じる様な人間を育てる事が私の社会参加の方法だと信じている。

誤解を招かない様につけ加えれば私は男女の差異を否定する様な考えは全く持っていない。

「男らしく」「女らしく」は私の好きな言葉である。息子が威丈高に妹に当る時私は云う。

「男のくせに威ばるな、見っともない」娘がすねて泣いている時私はどなる。「女のくせにうじうじ泣くな　情ない」これで大抵けりがつく。男女同権と「らしく」が子供達の胸の中でどう解決がついているのかその答えは二十年先の子供達自身の生き方に待つ他はないのだが、結構一人よがりの母親は満足して毎日毎日が楽しいのだ。

ほん

横須賀市
蜂谷まさよ

むかし、こどものくにという絵本があった。読者の中にも御存知の方がいらっしゃるのではないでしょうか。パステルカラーの美しい紙質もしっかりとした良い絵本でした。岡本きいちという人の絵が必ずのっていて唄を忘れたカナリヤ、月の砂漠、ゆりかごのうた等の童謡にそれは美しい可愛らしい絵が添えてあった。巌谷大四さんのお父さんの巌谷小波の童話がよくのっていたし、イソベ園長先生という方の独得の話し方のおはなしも大抵載っていた。又、澄宮様のお作として「みやくんが、御所から急ぎかえる時、まちに電燈つきにけるかな。」というお歌が馬車をうす青、それに街燈がピカピカと星の様に光って画いてあり、馬車の中には幼い宮様がおのりになっていた。なにしろずっと昔の事だからお歌も色彩も記憶ちがいがあるかもしれないけれど。そのこどものくには全部で何冊位あったろうか。母も気に入って大きくなっても大事にしまっておいてくれたがこの間の戦争でみな焼けてしまった。ひところ怪獣ものや変身ものが多くしめていた幼児向けの本だったのが、最近はマザーグース、その他外人作家の絵本や日本の若い童話作家のたのしい美しい創作絵本、それに昔ながらの昔話等、今は園児の子供を持つ息子達の幼い時にはみられなかった本がたくさん出廻って選択に困る程である。勿論本の虫になるのは好ましくはないし、偉そうにお説教する気はないが「漫画でも雑誌でも何でもよい。よむ事のたのしさを知ることが第一歩」と読書運動を進めているある教授の弁の様に時期を逸することなく適切な読書指導が行われるとよいと思う。

自分の事をいうのは面映ゆいけれど女学生時代夢中になって読んだシャーロックホームズ。母にすすめられて読んだ独歩。源をぢを今も時折とり出してみる、彼の哀痛は今ひしひしと身に沁みる様だ。又粉雪の舞う底冷えのする日は遠いロシアの原野をしのびながら、トルストイやチェーホフを読むにふさわしい。若い頃と違い近頃は随筆とかエッセイを時折よむが人間が淡白となるにしたがって長編のものや、濃厚なものを好まなくなるらしい。時間に余裕の出来た今よりも子供達とわあわあくらしていた以前の方がむしろ多くの本をたのしみながら読んだものである。なかでもそのしみじみとした人間味の故に苦難の日々にあっても生きるよろこびをあたえてくれた一冊の本、健康的で強靱な生に対する愛を感じさせてくれた一冊の本、表紙の色もあせ本文も茶色に変色している岩波の文庫本を、私は大好き

で大切にしている。それはフィリップ短編集「小さき町にて」であって「貧しい木靴屋の息子と生れ秀才でありながらめぐまれぬ一生を三十五才で閉じたという。わづか十余年の文学的生涯でありその壮麗なる開花をみる事は出来なかったが、彼の純粋にして少しの飾り気もない魂は、私達の心に素直に投影されて心洗われるのである。」と同書のあとがきにあるが、故に私も又彼の作品をこよなく愛するのである。

友への手紙

まつはしもと子

気持のよい季節になりましたね。お元気でいらっしゃいますか。ジュンちゃんも元気一杯通学していることでしょう。当方も、早いもので、この春から南子小学三年、健小学一年、そして耕二は十ヶ月となりました。耕二は所かまわず這いまわるし、何でも口に入れるしで、目のまわるような忙しさです。学校に雑巾四枚提出することになり、ミシンなしの私にはこれが重労働でした。市販の雑巾はナイロン混紡でしぼりにくいし、で一針一針縫うことにしたのですが、裁縫は大の苦手とあって、この作業は大苦痛。そこで、へのへのもへじのおっさんの顔に刺したところ、学校で「わあ、まつはしのぞうきん、いいなあ」と子供たちは羨しがられたそうで、子供の世界っておかしなものですね。

先日乗りたくてたまらなかった都電ことチンチン電車に乗って来ました。今、東京広しといえども、都電の走っているのは荒川線のみだとか。学生時代に都電で通学した私としては、本当になつかしい思いでした。

下町通りを走ってゆくと、ステテコ姿のおじさんが沿道のツツジに水をやっていたり、小さな飴玉屋さんがあったり、下町情緒をかきたててくれます。電停の宣伝看板にふと目をやると、我が愛するカエルちゃんがへたばっている図あり。「やややっ」と目をこらすと、割烹「浜作」のメニューとして、カエル串、イナゴからあげ、すずめ、なまず天ぷら等々と書いてあるの。ビックリするやら、おかしいやら。飛鳥山で下車して、見事なツツジに息を呑みました。なつかしいチンチン電車、どこまで乗っても大人七十円なりとは、今どきうれしいではありませんか。この沿線には、三十五米もある天然記念物の子育て銀杏とか、漱石のお墓だとか、太田道灌ゆかりの山吹の里の碑などがある由。今度又、百円玉をかき集めて、チンチン電車に乗りに来たいと思っています。

漱石と言えば、先日「坊っちゃん」を読みなおしてみました。やっぱり面白かった。あの小説が痛快なのは、日頃私たちはどうしても人目や人の言うことを気にしがちで見栄の殻をかぶってしまうけれども、坊っちゃんはまるでそれがないのですね。清がほめるように、本当にまっすぐで、虚飾はかけらもないのですものね。私は坊っちゃんのようにはとてもなれないけれど、何だかうれしくなって世の中を見る日がチョッピリ変わりました。

本と言えば、ツヴァイクの「マリー・アントワネット」ついに、読了しました。育児の合い間、合い間にわずかの時間を貪欲に利用して、それでも二ヶ月くらいかかったでしょうか。読み終ってズシリとしたものを

感じます。マリー・アントワネットその人の生涯よりも革命と言う巨大なものについてあれこれ感じさせられました。

先日の日曜日に、耕二を主人に預ってもらい、見たくてたまらなかった映画「ハリーとトント」を見て来ました。ハリーは七十才のおじいちゃん、トントはその愛猫。この映画には、年をとってゆくにつれて、誰しも抱く悲哀や、人生の苦さがあるにはあるけれど、ハリーにしょぼくれた感じはありません。髪は白く、足はよたついても、ハリーの心には、自分の人生を自分で自由に生きようという若々しい前向きの精神があるからでしょう。私もハリーのような老人になりたいと思いました。

今、あちこちで「生きがい論」がさかんですけれど、貴女の、「生きがい」は何？私は、私の生きがいは自分自身だと気づきました。本を読むのも、自分で楽しいから、子供を育てるのも自分で楽しいから、チンチン電車に乗るのも自分で楽しいから。

忙しい毎日ですけれど、キザな言い方ですが、結構充実した日々を送っています。お菓子屋さんの横に美しい花が咲いています。その花の名前を知りたくて、水羊羹四箇なりを買う破目になりましたが、その花がアケボノウツギだと教えてもらい、うれしかったわ。近くの小さな公園に、今、桐の花が咲いています。うす紫のロマンチックな大ぶりの花で甘いかおりが漂います。お花はどのお花もそれぞれに美しいものですね。

もうそろそろお昼です。今日は南極のオキアミでお好み焼きにしようかな。とってもおいしいですよ。試してみてね。それでは又、お体大切に。

さようなら。

教育過剰時代

新宿区
上沼博子

私達が子供の頃（昭和の初期）幼稚園に通う子供は稀であった。××議員のお嬢さんとか、余程だいじ？にされている家の子に限られていた。

その幼稚園も、林立している筈もないから、遠くまで通ったのである。小学校も至ってのんびりしたもので、子供の通信簿が悪かろうが、きびし過ぎる叱り方をされようが、目くじらを立てる親はあまりいなかった。

たまに担任の先生に抗議するべく出向いて逆に、先生からどなられている母親を見たことがあった。

かくいう私も（成人式の済んだ子供が二人あり）授業参観の折、教室の後ろに立っていて、吾が子ばかりが気になり、良く答えれば喜び、いつもいたずらばかりしているので、また何かしているのではないかと気が滅入ったり、何とも気の狭い母親であった。

いつか、〝母ちゃんと十一人の子供〟というのがあったが、理想の母親像というのは、あのようなお母さんを指していうので〝おおらかであること〟これが第一要素であると思う。

おおらかな母を持った子は、最高に幸せであり、しかもあのお母さんの子供達は、みな成績が良く、大学、専門学校を出ているのだから、自然にしていても出来るものは出来るらしい。受験地獄も人並みに味わったが、子育ての本質というものがわかってくるのは、ずっとあとであるらしく、二人の子供を実験台にしていたような後ろめたさに、今さいなまれている私である。

カット―林―

七月一日の公開編集会議で、わいふティーチインに折角よい問題提起があっても、言いっ放し、書きっ放しに終り、論争に発展しないのが残念だ、との発言がありました。同じ印象をお持ちの方も多いと思います。

そこで今回は、岩田さん、樋口さんお二人のご寄稿をめぐって、皆さまの積極的参加をのぞみたいと思います。

お二人のご意見はそれぞれ興味ぶかいものですが、もっとも基本的考えとして、お金を稼がないで家にいる主婦だからといって、劣等感をもつことはない、という点に大きな共通点があると云えるでしょう。主婦の価値?についてはいまや千差万別の考えがありますが、お二人のご意見を出発点として、この古くて新しい問題を掘り下げるために、皆さまのご寄稿をお待ちしています。

編集部

▲継続ティーチ・イン▼

被害妄想を捨てよう

仙台市　岩田　真砂子

驚きました。あの146号の「主婦の長電話」を読んで。

お断りしておきますが、私は何も、個人攻撃や、揚足とりが趣味でも、生きがいでもありません。反論するあまり、その様な部分がありましても、それは、素人の駄文のいたらなさで、生来の短気な気性、お調子者にありがちな、自画自賛の体と気楽に思っていただきたいと思う。

さて、「長電話」の件に、話を戻したいが、実は、私は、彼女が何を言わんとしているのか、さっぱり分らないのです。と言うより、話がつながらないと思うのです。主婦の長電話が、小遣いかせぎに、飛躍するくだりから、それが女性解放のとっかかりになるという結論まで。まず、「長電話」というものは、長いから問題になる。そしてそれは、多額の電話料金という形となり、多額の出費ということに結びつくことは、言うまでもないだろう。しかし、それだけでしょうか。その多額の出費を、主婦の小遣いかせぎで、まかなえば、長電話の権利が、同等に得られると同時に、評判も良くなるのでしょうか。世間は、それ程過酷でもないし、それ程寛大でもないと思う。むしろ、その悪評の根は、本当に用のある電話をしたい時、長電話は困るという程度のもので、一時を争う用件と、近況やおしゃべりを、比較してみれば、一目瞭然ではないでしょうか。

「主婦の長電話」という言葉に、非難がましい響きを感じるのは、被害妄想ではないでしょうか。そう考えると、小遣いかせぎでまかなう論理が出てきても、不思議とも思わない。おそらく、自分が養われているという意識が底にあるから、この様

な被害者意識をもたらすのだとは思うが。いつも思うのだが、この養われているという、意外に深い思い込み、又養っているという思い込み、どうにかならないものだろうか。急激に変えられる様な種類のものではないので、口惜しい。この不幸なおもい込み合戦を、抜け出さないかぎり、いくら主婦が、小遣いかせぎをしたところで、またしても、末端処理行為に終わるばかりでなく、それこそ、女性差別を助長することになるのではなかろうか。

働きたい衝動を反省して

国分寺市　樋口　弘美

実家へ久し振りに帰って、たまたま母とテレビを見ていたら、主婦のテレビの時間帯なのであろうか、しばしばこういう番組に出くわすらしく「主婦が働くことが是か、否か」というような内容の番組に母はあいそをつかして、「この頃はこんなことばかり議論している。働きたい人が働けばよい。家にいたければいればよいじゃない」とはきすてるようにいった。確かにそうであると同感した。

結婚してからの女性が暇になって、余暇をいかに過ごそうかと考えるとき、大きく分けて二通りが考えられる。お金を使って何かをする人、働いてお金を得る人。とかく人は労働の報酬としてお金を得ないと働いているように思わないようである。私もそうであった。お金が欲しいというよりは、お金を得なくては自分の存在価値がないように思っていた。しかし、結婚してるからには、子供を持つことは確定的とも言えるであろう。（子供の存在を前提としない結婚は何の為の結婚なのか、私には疑問である）。そうなると、家事一般を仕事としていた主婦が外に出て働くには、家事、子供の面倒等の仕事を誰かが代わりにやらなければならない。報酬なしに他人の子供の面倒、家事を毎日代わって見ることを誰もしないであろう。こういう大変なことをお金を払っているから人にまかせきってもいいという発想に疑問を持つ人はいないのであろうかと考える。

他人の子供の面倒を見たり、家事をすることが本当に好きで、いわゆる家政婦という仕事をしている人が実際にいるであろうか。また家事、子供の面倒を人にまかせて文句をいわない寛容ある態度を持つ人が何人いるであろうか。この両者の間には、お金を払っているから働かしてもいい、もらっているから働かなければならないという関係しか成立していないように思える。自分の仕事と、その為にやとわなければならない人の価値を天びんにでもかけて割り切らなければできないことである。つまり、この人を使ってでも自分がこの仕事をする価値があると割り切らなければ。その時は、保育で手を抜かれることにも文句

は言えない。

子供を保育園へほんの二ヶ月程入れてつくづく感じた。いかに保母さんの都合のよいようにカリキュラムが組まれているかを。何でも一人でさせるという〝しつけ〟といわれて美化されていることにしても、そうしなければ保母さんの手がなくて大変だからである。昼寝にしても、その間に保母さんが何かをするためであり、自分らの退園時間のために園児の迎えが少しでも遅くなることに厳しく、また朝は早すぎてはいけないのである。

確かに全てが子供の為になっていないわけではないが、少なくとも子供の立場からそれらが考えられているとはどんなに人が好くても解釈できない。働く人の子供を預かっている保育園であって、働く人の為を考えていない。五時前に終わる会社などないに等しいであろうに五時前の迎えを約束させられる。会社の出勤時間などおかまいなしに八時三十分前に預けるには時間外の予約手続を必要とする。それも数人のわずかな人数に限る。

こんな預け入れ体制であるから子供を持っての共かせぎは不可能に近い。女性が家事一般をすべきであるとは考えないが、とにかくどちらかがやらなければ家庭は維持できない。しかも現在に至る日本の社会情勢ではそれを女性がやってきているのであるからこれを根底からくつがえすことは並大抵のことではない。いくら男女平等を唱えたとてこのような結婚という悪条件をかかえたら女性は男性と同等の条件では働き得ない宿命にあるのである。本当に男性と張り合って仕事が出来る可能性を持っているのは独身の女性に限るのではなかろうか。このように家庭を維持する為には誰か専従者が必要なのであるから、家庭に閉じこもって家事に専念していることを卑屈に感じることはない。皆が外に出たがっているから自分も出なければと何の具体案もなしにあせる必要はない。

他人に家庭をまかせて外に出て働くことも家庭で働くことも、その労働の価値に何ら差はない。ただ他人からお金を受け取って、よい気分になるか、旦那様の給料からそれをへそくるかの違いである。だから給料の一部を家事労働の報酬として悠々と使うようにすればよいのである。本当に時間をもてあます（家事というものは際限のないものである。もてあますということは手を抜いていることをお忘れなく）人、やむにやまれぬ理由のある人のみが外に心を向ければよいのである。子供に手がかからなくなったその分を家の中をよりきれいにし、ホームメイキングに徹し、趣味を持ち、そうすることに満足して十分家庭で時を費やしている人は無理に外に向く必要はない。もっと他に楽しいことがあるのにとあざける人の誘惑にかられることはない。旦那様の給料を浪費する人生も結構有意義なことかもしれない。

未払い分の誌代の総額を知らせて下さいというおはがきを下さった方へ。住所氏名がなくてお返事ができませんでした。ご一報下さい。消印、大和郡山市。　編集部

保育問題のむずかしさ

板橋区　沼田　陽子

フリーのグラフィックデザイナーとして事務所を夫と持ち、仕事をしていましたが、去年の十月に長女が生まれ、女性が仕事と生活を両立することのむずかしさを再認識させられました。母となっても自分の仕事を持ち、生活・精神の自立を確立させていきたいと思っていましたが、保育の問題でつまずきました。働く女性の為に作られたはずの保育所であるのに、その行政の無理解さ。区で行なっている保育所に入れるのは八ヶ月からで、四月の入園時に八ヶ月に満たないものは入園できず、欠員待ち。福祉員いわく

「おたくは月齢に満たないので今回はダメです」

「それでは、欠員があれば入園できるのですネ」

「まあ、そういうことだけど、なかなかあきませんよ」

「欠員がなければ来年の四月まで入園出来ないというわけですネ」

「そういうことですなあ。それに来年の四月にはもう一才過ぎてるからここらでは一才入園が一番倍率が高くなるので入るのはむずかしいですよ」

「それではいつ入園の可能性があるのでしょうか」

「そうね、五才位になれば入れるんではないですか」

このように言われ、しかたなく一応欠員待ちで書類を提出しておきましたが、これではどうにもなりません。それにたとえ入園できたとしても、朝九時から四時三〇分までで、朝は良いとしても、四時三〇分まででは、一時間前に仕事を終えて迎えに行かなくてはなりません。働いている人がなんで仕事場を三時三〇分くらいに終えることが出来るでしょうか。これでは、女性はパートのような型でしか仕事を持つことができず、一つの確立した職にはつけないことになります。親にあずけたくても親は他界し、さりとて月に四～五万もする他の私設保育所や個人の保育所へあずけるには荷が重すぎます。保育の問題一つとっても、いくら女性が自立確立にめざめても、挫折せねばならない状況に追いこまれてしまうのです。女性の地位が向上したと言われている現在でも、まだまだ女性が仕事し、かつ家庭を持って生きて行くには、めぐまれた環境と、よほどの覚悟を必要とせねばならない現実に、せつない思いでおります。

一つの独立した職をこなせるのは、独身、あるいは子供のいない人にその大半が占められているのが現実です。

切実に、働く女性の為の福祉行政が行なわれることを心より望むと共に、自分自身も、積極的に、女性の為に働きかけて行かなければならないと思う毎日です。

インテリ・マダムがなぜ悪い？

藤沢市　木村　澄子

〝インテリ・マダムの欲求不満発散剤やろ。そういうの、うち、一番かなんねん〟と言う評価があったといいます。私が思うに〈わいふ〉についてある二色の批判のうちのひとつがこれ、もうひとつはまだまだなまぬるいというものでしょう。考えること、読むこと、書くこと、これらはみな行動することではありますが、行動することのすべてではありません。私は行動する人間のための雑誌となる方向性を、もっとはっきりとうちだしてほしいと思っているものです。

けれどもそれは現在の〈わいふ〉の活動や存在価値を否定するものではなく、先のインテリ云々という感じ方を切って捨てるつもりのものでもありません。

私は現在無職、文字通りのいわゆる専業主婦ではありますが、つい先日も、同居しているのでもなく他に看護人がいないのでもない舅の病気の世話をする破目になり、八ヶ月の息子にその病気をおみやげにもらって結局二週間余りをそのためだけに費やしてしまいました。もし、職についていたら、息子は保育園から拒否されたでしょうし（病児保育システムはおそらくない）私自身、職場で言われるまでもなく、風邪ひとつでこのさわぎでは、と考えなおすようなことになったかもしれません。

現在では、やれる人がやる、むしろがんばり通すという形でしか女性が職業をもつということはできないと痛感しました。

ところが、ともすればそうしてがんばっている人の足をひっぱるとまで言わなくとも、そこまでしなくとも、という批判の目があるのも事実です。そういう意識と、考える主婦にインテリ・マダムのレッテルをはる意識に、一脈通ずるものがあると思うのは考えすぎなのでしょうか。

インテリとはインテリジェンス、知性の意味であって、知的であり、かつ社会的にも活躍している人、特に女性には尊敬の念を禁じえないのですが、なぜか逆に学歴などまで隠さなくてはならないような日常生活をおくっていることも事実なのです。もちろん、日常生活に学歴などが直接に関わってくるわけではありませんが、なにげない、子供をあやしながらするおしゃべりの中に、学校の友人たちの話が出たりするたびに、高校とか大学とかいわずに意識的に学校といっている自分についていささかきゅうくつに感ぜざるを得ません。学歴による社会的差別の存在は、場面がかわれば様相を変えてせまってきます。おしゃべりぐらい気がねなくしてしゃべりたい、相手にも自分にも傷がつきやしないかとおそれることなく。――と考えると同じ位の（年齢、学歴、容貌、はては食べ物の好みまで酷似した）人を見つけ出して、金魚のふんか、シャム双生児のようにする

しかなくなっていくのでしょうか。

ジュリー（沢田研二）にあこがれ、ベルバラを読みふけり、流行のファッションに魅かれ、FMのクラシックを流しっぱなしにし、床が沈むほど本や辞書をつみあげ、どれひとつマスターできてもいないのに次々に新しい外国語に手を出し、詩をかき、文学（古典とSFを含む）と社会科学の本をごたまぜに読み、国語学をやり、そのどれも、はずかしがらずにいられる――そういう生活は、夫と二人だけのものであり、外にむけては時と場合によりマスクをつけかえるというのは、一体何がおそろしいのでしょうか。ドジであわてものという評価には顔面を笑いにして応えられても、インテリと言われ、プチ・ブルと言われたら、ちょっとしたパニックに私の心は見舞われずにはいないでしょう。

けれども、それだからこそ、〈わいふ〉には、そんなことにビクともせず自信をもってむしろ反論するぐらいでやってもらいたいとも思うわけです。五月十八日朝日新聞〝女の子はつくられる〟に、女らしさを理想とする層、意識をもつ層、中間層が三分の一ずつを占めるが、中間層が第一に接近している、とありました。十年前はまだ第二にひかれる割合が多かったそうです。意識層にひきもどすべくインテリでも何でも、やれるものが、やれることからやりはじめない以上、いつまでたっても女と男、若者と老人、子供と大人、生徒と教師、その他学歴、財産もろもろの理由からの差別はまぬがれないでしょう。

女
エロス
第9号
編集＝「女・エロス」編集委員会
A5判208頁／780円

特集＝売春考 はるかなるエロス

性道徳からの解放　深江誠子／男性ライターの書いた「従軍慰安婦」を斬る　丸山友岐子／性労働の経済学　田中由布子／文学の中の娼婦　駒沢喜美／五彩の虹　溝口明代／片隅の人生　田中さち子／〔対談〕売春を通じて女の労働を考える　谷村三津子＋吉清一江

●連載　女の労働(7)娼婦性と売春のはざま　河野信子／裁かれる女(7)罰せられるべきは誰か　中島通子／女六法(7)売春防止法

●報告　夜はたらく女から――怒りを潜在化させてはならぬ　山田ゆみ／最近のアメリカ――売春婦とフェミニストの〝お家〟の事情　浪漫知也

越境
朝鮮人・私の記録
高峻石著　朝鮮人の心のなかに牢固として生きている国境＝玄海灘を幾度も越え、疾風怒濤の時代を生きたひとりの朝鮮人の自己史。その記録は、一つの青春のドキュメントであり、同時に日本の朝鮮植民地支配の三六年間の歴史を照射する。四六判上製／1300円

社会評論社
東京都文京区本郷2-5-10　電話03(814)3861　呈図書目録

〈保育所に関するアンケートのお願い〉

これまでにも、保育の問題をめぐって、こどもにとってのプラス面、マイナス面、さらに保育の現状についての母親側、保母側からの批判など、さまざまな声が「わいふ」によせられてきました。

働く母、学ぶ母にとって、保育設備の充実ほど必要なものはありませんが、預ける側にとっても、預かる側にとっても、現状は満足すべきものからはほど遠いようです。

ともすれば、預ける側と預かる側の対立になりかねないこの状況を、どのように理解し、改善していったらよいでしょうか。

その具体的な手がかりの第一歩として、次のアンケートにみなさまのご協力をいただきたいと思います。八月三十一日必着で編集部あてにお送り下さい。

① お子さんを保育園に預けたことがおありですか。

② あるかたは、その理由を書いて下さい。

③ ないかたは、その理由。

④ ②のかた、保育園の種類は？　地域は？

公立　私立　認可　無認可

⑤ 保育料は、当時何円でしたか。

昭和　年　月額　円

⑥ それについての感想（高い、やすすぎる、等）

⑧ 保母さんの数と子どもの数の比は？

⑧ 保育内容はあなたの希望をみたしてくれましたか。

⑨ 保育時間が十分でなかったとき、どのような方法を講じていらっしゃいましたか。

⑩ 保育園に預けたためにこどもにとってプラスだったと思う点。

⑪ 同じく、マイナスだったと思う点。

⑫ 保母さんと気がねなく自由に話し合えましたか。

⑬ こどもは母親の手で育てるべきだとお考えですか。

⑭ あなたの職種、年令、お子さんの数と年令（当時）

⑮ その他何でもおきかせ下さい。

回答は、この頁に書きこんで切りとり、そのままお送り下さってもけっこうですし、スペースのたりないかたは、一部を原稿用紙に移して下さってもよろしいです。皆さまのお声を通して、問題を掘りさげて行きたいと思います。一人でも多くの方のご参加を期待致します。どうぞよろしく。

〈編集部〉

特集

女と政治

女たちはいま、議事堂の中に閉じこめられていた政治を、暮らしの中に取り戻そうと試みている。日本でも外国でも、政治が男だけの世界であった時代は、もう帰ってはこない。

ハル・O

世の中を変えていくのは 私たち一人一人だと思う

●座談会

司会―編集部

なぜ女に投票するのか

駒野陽子　木村徳栄　橋本宏子

牛込一中教諭　消費者運動ボランティア　白梅女子大講師

司会　七十年代に入って、婦人運動が大変活潑になってきましたが、これまではむしろ、女性自身の意識の変革とか、男女の役割分担の見なおしなどという面が強かったわけですね。それが今度の参院選で、女たちが自分の手で女性の候補者をたてて〝女の票は女へ〟ということで運動した。

これまでは政治は体制だということでむしろ敬遠する傾向があった中で、これはまったく新しい一つの動きだった、と思うんです。

こういう運動に対して、一方では、女だから女に投票する、というのはナンセンスだ。候補者は、政党で、人物で、えらぶべきなんで、とすれば経験の深い政治のプロをえらぶのが当然だ、という考えがある。

もう一つ、女にもいろいろある、女だからといって女の味方とは限らない、男だって女のことをよく理解してくれる人がいれば、投票したっていい、という考えも存在しています。

今日はそんなわけで、長年、婦人運動に関わっていらっしゃり、また今回の選挙でも活躍されたみなさまから、〝女の

票は女へ〃ということの是非を中心に、話していただきたいと思います。

なぜ女をえらぶか

駒野　今度の運動は、戦後女性議員が沢山出た当時の、女は女同士、といった感じのものとは違いますね。女なら誰でもいい、というものではなく、女の問題を本当に分ってくれるのはやはり女だ、そういう人を自分たちの手で出したい、という、一種の市民意識だったと思うんです。

ただそのムードは、やはり都市でようやく起こってきたもので、地方ではまだまだなんだということが、今度の選挙でよく分りましたね。

木村　私は四十万都市といわれる東京の相模原に住んでいますが、四、五年のサイクルで、人口がドーンとふえるという新興都市の中で、地域の住民がまったくバラバラになっている。その中でも女たちはすべての点で疎外されているんですね。

たとえば魚屋のオジさんでも、男なら選挙となれば、誰に入れようとか、誰を推すとか、それぞれ大いに語っていますよね。例えそれが自民党レベルであってもね。男たちにとってはある点で選挙なんか日常のものなんですよ。

女にはそれがないんですね。

運動しようったって、まず車がない。杭を打つ力がない。結局子づれで昼の日中にビラを貼ってまわる、ということぐらい、あるいは、五―十人の友だちにハガキをかくということぐらいしかできない。そういう現実の中から、女たちが自分の手で、女の代表を出そうとすることに意味があるんだと思うんです。

PTAとか消費者運動、住民運動などの中から、地域に根づいて隣り近所とのコミュニティ関係を作りあげようとしている女たち、そこから逃げられなくて、そこから出発しなくてはならない女たちが無数にいる。その女たちがまた、自分が女であるということで受けている疎外の状況に気づいて、本音をぶつけて互いに手を結ぶという、それが吉武さんを推す〃連動を求める会〃の大きな意味だったと考えます。

橋本　私はね、婦人の解放は女だけではできないと思ってるの。女性自らが立ちあがるということも大事だけど、最終的には政治を動かさなくちゃダメですよ。

吉武さんは、既成政党批判をなさってるけど、政党というのはいい加減なあつまりではなくて、政治を変革するために一定の理念に基づいてできた集団でしょ。

現状批判はいくらでもできるけれど、実際に政治をかえていくのは、自民党という政党に代わるものがなければならない。外からああせい、こうせい云っているだけではダメなんだから。

ベーベルも「未来は婦人と労働者に属する」と云っているように、私は社会主義になってこそ、婦人が本当に解放されると思う。そうすると、社会主義を目指して戦っていく既成政党が、ともかくもあるわけでしょう。そういう既成政党を育てていくということの中で、婦人がいっしょに手をつないで、解放をかちとっていくということが大切だと思いますね。

木村　私たちが候補者を立てるときは、少くとも男か女かのどちらかしかないわけでしょう、そんならば私は女をえらびますね。女は女へ、という単純思考ではなくて、少なくとも女の問題をよく理解し、女のために働いてくれるという点で

信用できる人間は女である、ということを私は確信をもって云えるんです。

駒野　今の日本の女たちにとっては、政党が女の問題を本当にやってくれるのか、という不信感が拭えない。女の問題はやはり女が考えていく、という意志表示をするのが必要なんじゃないでしょうか。

橋本　今、票全体でいうと女性票の方が多いんだから、各党とも婦人政策には力を入れているわけ。だから自民党や公明党が、婦人政策を実際どう行なっているか――自民党は扇千景を出したりするし、民社党は母性保護なんていってるけれど中味はどんなか、基本的には自民党と似ているし、そういうことを、婦人のキメこまかさでどんどん追及し、批判していけばいいわけよ。そういうことをしないで「女は女へ」だけでは困るのよ。

駒野　私も現在の日本人の政党ばなれの現象は不幸なことだとは思いますよ。ただ信ずるに足る政党があって、その政党が自分たちのために戦ってくれて――という状況があれば、女の人も迷わないんでしょうけれど、女は一体どこに自分の声をとりあげてもらえるのか、というあせりが「女は女へ」というかけ声になるんですね。

既成政党への不信感

駒野　この間、司法研修所の裁判官の問題でいろいろな議員さんの間をまわったんです。そうすると、革新系の方でも、女の人は家庭にいるのが本筋なんだけども、能力のある人を差別するのはケシカラン、という程度の理解しかないんですねえ。

木村　社会党も共産党も、産休の問題をとりあげるにしても、妊娠七ヶ月の人が働かなくてはならない、可哀そうじゃないですか、という取上げかたしかしない。あわれみ福祉という感じですね。カチンときますね。

小さいときから女を差別するような育てられかたをしていて、それがしみついている男たちに、本当に女の問題を肌で理解してもらうなんてできないですよ。

駒野　それと労働組合もだめ。この間、行動する会で総評と同盟の人をよんで話をきいたけど、実に男はダメだね！というかんじでしたね。

橋本　それはほんと！

男と女の賃金体系は、全くちがうのよね。それに目はつぶったままで、「内職しないでもいい賃金を」「共稼ぎしないでもいい賃金を」なんて云ってる。

駒野　だから政党より、ともかく女が女を出す、ということで、そういう姿勢をかえさせたい。もし女の云い分がチャンとみとめられる制度になったら、それはそれでまた空気が変るということもあるでしょう。でも私、今のままじゃ絶対、変らないと思うの。

そういういみで今度の選挙は女の側からの一つの警告だったと思うんです。

橋本　だからその声をみんながこれと思う政党に反映させていけばいいのよ。

駒野　私はね、共産党、社会党、それから公明党の議員さんぐらいまで含めてね。女の議員だったらこの問題については結

集できるということがあると思うんですよ。例えイデオロギーが違っても、統一戦線を組めるんじゃないかという期待は持てる。

橋本　私はそう思わないわ。

駒野　国会の中で婦人問題の委員会はできないものでしょうか。

橋本　せいぜい懇談会ぐらいではないかしら。大学の中でも婦人問題の講座がほとんどない状態ですもの。

駒野　大学でも、組合でも、政党でも、そういう状況でしょう。だから、女は女に、ということになるんですよ。

女というものがね、最終的に男性に疎外を受けない状況がくればね、女でも男でもかまわないという時代がくるでしょうけど、そこへ行くまでに、女を正面に打ち出した運動というものは、ずーっと必要だと思うの。

橋本　私はそうは思わない。それは、中々理解しちゃくれないわよ、たしかに。だけど諦めずに根気づよく分らせていくこと、それと、私たち自身がもっと政治参加をしていくこと、それも、政党の中で女の議員を育てて行くという方向でいくべきだと思う。

ことに共産党は女の議員が多いし、婦人労働の問題なんかも、ずいぶんキメこまかく改善に努力しているんですよ。

木村　私はね、政党が世の中を変えてくれるとは思っていないんです。世の中を変えていくのは私たちの一人一人だと思う。私たちがそれぞれの自立と変革を求めて地域で何ができるかと一生懸命やっている場で、政党に指導性を持ってもらおうとは思わない。

ところがね、そうやってお母さんたちがやっている運動に、共産党が介入してきて、結果的にはツブしちゃう。生協でも、選挙運動でも、ドドーッと入ってきてね。

駒野　地域の自主的運動が、こっちへこい、こっちへこいと政党から引っぱり合われる中で、既成政党はもういやだ、という拒否反応で一杯な状況だと思うの。そういう意味で、六十年以降の、既成政党の女性に対する強引な働きかけはやめてもらわなくては……自民党も含めてですよ、もちろん。

選挙の時は、自民党も調子のいいことを云うけれど、それじゃお任せしときましょうとは、女たちも云わなくなった。ヘタでも、ドジでも、当選しなくても、女たちの手で何かしようという欲求が深まった。それをどう汲み上げるかが政党の資質を決定すると思いますね。

一定の党派に入っている人が、「そんなことじゃ問題は解決しない」という、その決めつける体質自身が、まず拒否反応を示されると思うんですよ。

橋本　でも私は政治というものは、もっと厳格なものだと思うから……女は女へ、ということで出した無党派の女の代表が、本当に女性のために働くかどうかは信用おけないと思ってるわ。

日本がこの三十年で培った民主主義というものはすばらしいものですよ。労組の婦人部でも母性保護や賃金改善で、女性が働き続ける権利を守るたたかいをたくさんしてきています。そんな中で政党

が自分たちの考えをうけとめてくれないという考えも短絡的だと思うし、ただ代表を国会へ出せばいいということでなく、どうやって政治を基本的に変えていくのか、もっと大きな視点で考えていってほしいのね。

木村　今まで女たちはむしろ自己にとらわれていろいろ活動してきた、それはそれで小状況での政治だとも云えるけれど、そこから一歩出て、もっと大きく政治をつかむ必要があるんじゃないか、自分の個からでて、ポンととびこめる政治の場を対象に持つということ、個々の運動を第一段階とすれば、今それが第二段階に移った時期だと思うんです。

駒野　女と政治のかかわりが、自分たちの代表を出そうとか、ポスターを貼ろうとかいうように行動として現れたのは、本当に今がはじめてですよね。

今度の選挙の中で、議員が出た、出ないじゃなく、「女は政治」ということを自分がやってみて勉強したということは大変な進歩だと思うの。

橋本　それはそうよ。台所から出るということは、私も大変な進歩だとみとめるわけ。

票集めには熱心だが

橋本　今度の選挙では社会党も共産党もずいぶん低落を示したけど……その中でいわゆる中間政党と自民党が安泰で、戦後三十年たっても政権をいまだに革新政党がとれないっていう現実をふまえながら、どうやって革新側が手をつないで革新票をふやしていくか、それができなければ婦人の未来なんて、ちっとも展けないと思うの。

駒野　共産党がなるべく女の候補者を出そうとしている点は評価できると思う。社会党でも女の人は何となく冷遇されているという感じがしますものね。

木村　望月優子さんなんか、社会党蹴って出てくれないかと思いましたね。

駒野　今度の選挙の中で〝女のことをもう少し考えていかなければならない〟っていう線が、政党の中で少しは出てきましたか？。

橋本　共産党は婦人票をどうやって集めるかはものすごく意識していますよ。去年、今年と婦人政策、教育政策を出していますしね。自民党はいつも何も云わないのに選挙になると何だか出すのよね。おととしは「育児休業法」。

日教祖があれだけやったのに、ツブしてツブしてツブしぬいて、国際婦人年だからといってファーッと出してきて、五党一致よ。選挙の票かせぎのために、いろんな目先のゴマカシをやるわけよ。

どうしたらそういうゴマカシにのらないようにやっていくかっていうこと、ひとつひとつ婦人の政治意識を、底辺から開拓していくっていう、地を這うような政治活動というのが一番必要なんじゃないかしら？

木村　そう仰云るけれど、現実にそれをさせないのが既成政党なんですよ。

私の地域は、やっとここ十年根づいた近郊都市。十年前に住んでいた人がほんの少しというようなところでね。三十人

いる市議のうち一人も女がいないのは――ということで女たちの力で出そうとした。

地方議員の選挙ですから百二十万の法定費用のうち六十万を、全部カンパでやったわけです。お母さんたちが手弁当で、ご主人までかり出してね。

そんな、たった一人の力のない女性候補を、ものすごい量の宣伝カーをくりだして、すさまじい個人攻撃をして共産党がたたいたんです――下半身の攻撃までしてね。蓮見事件よりもっとひどいやり口で。

本当のいみでの政治の変革は、一番末端の部分からしなくちゃならないものでしょ。消費者運動でも、PTAでも、ぜんぶそういう「場」だと思うんですけれどね、そういう場で小さな芽がでてくるのを全力をあげて叩きつぶそうとする。

橋本 相手攻撃の方法がおかしいと思ったら堂々と批判すればよいでしょう。それよりも、自民党に対して革新側がどう手をつなぐかということを、もっともっと考えていかなければならないんじゃないかしら。

司会 駒野先生が「女教師だけを責めないで」という本を出されたでしょう、その後でサンデー毎日が「女の先生やっぱりダメ」という記事を出したんですけれど、今の問題と共通点があるように思えますね……。

駒野 あのね、女の先生やっぱりダメと云う人が大概女なのね。女と女が足をひっぱりあっている状況っていうのは、政治の面でも連帯しなきゃならない人たちが足をひっぱり合ってる状況と大変似ていると思うの。

こと政治に関しては、少くとも政治の場ではケンカするのはやめようという態度で行きたいと思いますね。ところが革自連あたりまで含めて、そういう人たちがお互い結構対立してるのよね。

司会 悲しいですねえ。その上一般のマスコミが焦点をあわせて書き立てるのは、女性党のああいう結末だけでしょう？

木村 そう、そうです！

橋本 まったく、お笑いですものね。

司会 女性党のてんまつは、結局女が女の足をひっぱることになりましたね。

新版 世界女性史

玉城 肇著――1500円

樋口恵子さん（評論家）**の推薦文から**

……この本には、世界の女の歴史、女に対する歴史上の様々な学説が適切に紹介されて、現在、私たちがどんな問題を抱え、どこに位置しているかを知る手がかりになるでしょう。……女性の学習グループのテキストとしても大へん適当な本だと思います。

ロシヤ風物誌

内村剛介著――1200円

各紙誌で好評を博した話題の書 重版出来！

日本人にとってもはやロシヤを素通りさせることができない現在、〝日本のソルジェニツィン〟といわれる著者が、ロシヤ民衆のツブヤキのなかにかくされた「ロシヤのホンネと心性」を、独特のユーモアとアイロニーを縦横にさせてみごとに浮彫りにする。

東京都千代田区神田神保町3-10
電・261-4509　振・東京6-196535

西田書店

社会主義で女は解放されるか

司会　二三日前、インドネシアの人から話をきくチャンスがあったのですけれどね。上層階級の人は日本の女性以上に自由に、派手に活躍している。しかし下層の女性のみじめさというのはひどいものなんですね。だから社会体制が変らなければ女の解放もあり得ないということは、ああいう国ではたしかに本当だと思うんです。

しかし一方、ソ連など、社会主義になった国で女性は必ずしも解放されていない。女は外で働く一方、相かわらず家事、育児を抱えこんで疲れ果てている。このへんのところどうお考えでしょうか。

橋本　私は、やっぱりソ連の方がアメリカより女の未来ははるかに開けていると思うのね。教師にしても、医師にしても女が多いし、子どもを生んでもまた学生になれるし……

駒野　いやソ連みたいに教師や医師が国営事業になってる場合、男性にとって余り魅力のある職業じゃないんですよ。

橋本　収入の多寡じゃなくて、女の人が

能力をのばして行くといういみでチャンスがずっとあるんだと思うの。ソ連は日本のお手本にはならないけど、あの国が革命をおこさないできたら、今よりもっと婦人の地位は低かったでしょうね。

日本みたいに教育程度の高い国が社会主義になったら、女の人の未来はもっともっと開かれると思うのよ。

だけど本当のいみの解放はね、共産主義段階にならないとムリよ。能力差がなくならないとだめ。社会主義段階ではだからだめなんです。

司会　能力差というと？

橋本　女には出産があるでしょ。

駒野　資本主義社会では、労働力がすべてだからたしかに出産はデメリットでしょう。でも、社会主義社会でもダメでしょうか。出産が一つのメリットとして受け入れられないかしら。

橋本　ダメでしょうね、まず。だってたとえばソ連でもね、業績競争なのよ、大学の先生だって。出産前後六ヶ月、本が読めなかったらダメじゃないの！　各人が労働に応じて支払われるという社会主義段階では、能力差による差別っていうのはつきまとうんですよ。

大所高所って一体どんなもの？

木村　女は別に自分でえらんだわけでなし、生む性を与えられて生まれてきたわけでしょう？　社会主義でも能力差というかたちで人間に対する評価を打ち出すんなら、私はそういう主義そのものに対して疑問を持ちますね。結局、資本主義といったって、社会主義と云ったって、現在の産業社会そのものを肯定した考えかたでしょう。体制ばかり問題にしないで、私は体制を支えている現在の文明の根っこのところをもう一度見直すことが必要なんだと思う。

司会　この間編集部の中から、女が参議院に出るということへの疑問が出たんですよ。女性は保育所の問題とか、日常的

なこまかい問題にばかり関っているから、地方選挙なら別かもしれないが、参議院のように外交政策とか、防衛問題など、大所高所からの政策決定の場に立候補されても、投票する気持にはなれない、というんですね。

駒野　大所高所からものを見ないと云うなら、私は、じゃ大所高所って一体どんなものなのかと云いたいですね。生産性の向上とか、外交政策とか、そういうことだけをね、大所高所というのはおかしいんじゃないか。

人間にとってどんな生活が望ましいのか、それを手探りしながら私たちの生活の内容をひとつひとつ変えて行くことがね、どうして大所高所じゃないのかしら。

大きなことは男たちに任しておけばいい、と云うのでなく、より人間らしい生活を模索するという価値の転換を含めて政策を考えていくというのでなければ……

木村　中国では農業を主にして、工業をそれに従えるという形をとろうとしていましたね。何も原始共産社会に戻らずとも、ある程度そういうことはできるんじゃないかしら。

駒野　私は中国へ行って感じたんですけどね、今の日本に比べればたしかに近代化の弊害というものは少ない。古きよき時代とも云えるわね。ところがその古きよき時代から脱け出そうとして中国の人たちは必死なんだから……

橋本　性差というものはね、生産力が高度に発達した段階で解消して行くのよ。富の私有がなくなってね

木村　生産性の非常に高くなった社会で性差による差別がなくなっていくということは、その社会が今までの文明観を下じきにしている限り、私には信じられませんね。

橋本　こどもを生むという仕事が、ものを作るという仕事と同じように評価されるようになればいいのよね。物質生産が優先している分じゃ、ダメでしょう。

駒野　ソ連でも、中国でも、まだ物質の不足に悩んでいますからね。

木村　公害問題も含めて、資本主義でも社会主義でも、同じ矛盾を拘えている産業構造をね、どうとらえていくか……第三世界の中では、アジアの女たちも含めて、もっと自然な生活が行なわれていたわけでしょう、そういう文明の形態が現在の地球上にも存在しているということを考えていってもいいんじゃないかしら。

駒野　世界が小さいグループに分れて、衣食住を自給自足する、ということで満足する、そういうことが可能かしら。

第三世界の人たちがね、じゃ自分たちの生活に満足しているかどうかというとそうじゃないと思うのね。外の世界を知らないで、これでいいと思っている人と、そういうものを知ってしまった人との間

では、とてもコンセンサスは得られないんじゃないですかね。

日本国内でもそうだと思う。吉武さんの選挙のときも、彼女は私たちはものはほしくない、いのちを守れればいいのだという云い方をしていらしたけど、吉武さんはそれでいい、私もいいと思うんだけど、それじゃいやだという人をどうやって説得していくか。

木村 でも私たちのやっている消費者運動の中でも、真の豊かさは何かということが模索されているわけだけれど、本当に必要ないものが溢れていて、その中に人間がひたり切っている、そういう現実が皆を苦しめ出していますよ。

駒野 今まで作られてきた文明体系というか、価値体系に対してアンチテーゼを出すということを含めて、女が女に投票しよう、ということでなくては、と思いますね。

（まとめ・田中）

増刷出来！

わいふ144号〈なぜ結婚するのか〉

「現在の結婚はデモ・シカ結婚が多いように思う。男がデモ結婚できる身軽さは、女から見ると羨しくさえある。多くの女たちは、結婚シカ生きる道がないからだ……」

わいふ144号の特集によせられた、樋口恵子さんの一文です。アンケート、寄稿を通じて、日本の女たちが結婚へ追いこまれて行く現実が、この号の中で浮きぼりにされています。ご注文をお寄せ下さい。

わいふ編集部

宝石科学アカデミー

Gem Trade Academy of Gemology, Japan

渋谷区千駄ヶ谷3－28－10
第2豊国ビル2F
☎ (03)478－6661（代表）

—世界の権威G．I．A（アメリカ宝石学協会）の基準による鑑別と鑑定—

宝石相談コーナー：お手持ちの宝石の品質分析、宝石の買い方、その他宝石について何んなりと御相談下さい。アメリカ宝石学協会の認定資格をもつジェモロジスト(G.G.)がおこたえ致します。

演劇・音楽・映画のたのしい鑑賞団体

都民劇場

都民劇場とは

＜都民劇場＞といっても劇場の名称ではありません。30年の歴史をもつ演劇・音楽・映画のたのしい会員制の鑑賞団体です。
選びぬかれた粒よりの定期公演を、大変お得な会費でご覧いただけますし、入場券は葉書一枚でお手元に届く便利なシステムです。下の５つのサークルの中からお好きなサークルをお選び下さい。
ご家族・お友だちをお誘い合わせの上、ぜひご入会下さい。

■豪華で多彩な舞台鑑賞……**演劇サークル**（定期公演年10回）
９月＝東宝公演＜王将＞東京宝塚劇場　10月＝若手花形大歌舞伎／新橋演舞場
11月＝ミュージカル＜グリース＞日劇　12月＝松竹公演＜天守物語＞／日生劇場
〔会費〕９月から７ヶ月分　9,050円　　３ヶ月払 4,250円

■歌舞伎をじっくり味わう……**歌舞伎サークル**（定期公演年６回）
９月＝新秋大歌舞伎　11月＝顔見世大歌舞伎・仮名手本忠臣蔵
〔会費〕９月から半年分 8,000円　　２ヶ月払 3,000円

■代表的な新劇公演を網羅……**新劇サークル**（定期公演年10回）
10月＝民芸＜わが家は楽園＞砂防ホール　俳優座＜夜の来訪者＞俳優座劇場
12月＝文学座＜金木犀はまだ咲かない＞東横劇場
〔会費〕10月から半年分 7,300円　　２ヶ月払 2,500円

■秀作映画をたっぷり鑑賞……**映画サークル**（定期公演年12回・試写会２回）
８月＝遠すぎた橋／東劇　ニューヨーク・ニューヨーク／丸の内ピカデリー
10月25日＝映画芸術劇場「股旅」「京に生きる味」
〔会費〕半年分 4,900円　　３ヶ月払 2,500円

■**音楽サークル**（定期公演年10回・定員制で現在満員・予約登録受付中）

ご入会の方法

●入会金は、個人300円、団体（３名以上）200円です。
●入会金と、ご希望サークルの会費をそえて次のいずれかの方法でお申込み下さい。
1.都民劇場事務局へいらして手続をする。 **2.現金書留**で郵送する。 **3.銀行振込**（三菱・富士・協和・三井・第一勧銀の本・支店為替窓口に振込む。本会専用振込用紙常備・手数料不要）

＊くわしくは　〒104　中央区銀座５－１－７　数寄屋橋ビル　(財)都民劇場
TEL 03(572)4311（日曜・祝日は休み）　案内書進呈

特集投稿

女は女を議会へ

岩本 千鶴子（台東区）

二年前の参院選の時でした。夕食の買物に出かけた私は、偶然市川房枝さんの街頭演説会に出会いました。丁度演説が終って人々が散り始めた所でしたが、日頃市川さんの政治姿勢に共感を抱き、尊敬して居りましたので思わずかけより「市川さん、お元気で婦人の為に頑張って下さい」と手を差出してしまいました。市川さんは「ありがとう、ありがとう」とおっしゃって私の手を両手でしっかり包んで下さいました。深い深い皺が刻まれ、赤銅色に日焼けしたその手、その顔、自己の利益をかえりみず、日本女性の地位向上に一生を捧げて来られた御姿にいつまでもお元気で……と願わずにはいられませんでした。

又、いつも選挙が近づいてくると、戦後初の婦人参政権の与えられたあの時の選挙の事が鮮かに目に浮んで来るのです。私も丁度二十才を迎え、初の権利を衆議院に使う事が出来たわけで、わからないながらも一人前になれた興奮に酔いながら、あちこちの演説会を聞いて廻りました。そして、どうしても女は女の代表を議会に送らなければ、真の女の幸せを考えた政治が行われる筈がないという結論を得る事が出来ました。幸い三十数名という多数の婦人議員が誕生し、その中に

婦人参政権獲得史
女の百年戦争

え・西田 淑子

ヨーロッパやアメリカにおいても、女性は十九世紀まで、横暴な夫の奴れいでした。財産の相続権や所有権が制限され持参金さえ夫のものとなり、商売をすることもできませんでした。

私の女学校の先輩山口さんも入られ、同窓会で丁度司会をさせられ、胸をときめかしながら皆さんに山口さんを紹介した事もありました。以来ずっと女は女を…という考えで通して来たわけなのですが、残念な事にあれだけ多かった婦人議員も今日では殆んどの方が姿を消してしまいました。これではどうしようもありません。

何故このような事になってしまったのでしょうか。本当に残念だと思います。長い長い間、婦人に参政権を……と叫び血のにじむような努力を続けて来られた市川さんはじめ多くの婦人先駆者の方々がどうしても得られなかったものを敗戦の代償であるかのように、アメリカの手によって与えられたという事が一般の女性達に真のありがたさを感じさせなかったのでしょうか。それともやはりこの国では民主主義になって三十年もたったというのに、まだ女性は男性のあとに従い内助の功を……という考えが根強く残っていて、婦人が議会に出る事を快く思わないのでしょうか。

女の中にも自分自身を低く置く事を、又発言しない事を、美徳のように勘違いしている人もまだまだ多いようです。又ずるい打算から男の人にまかせてかわいい女でいた方が、らくに人生を送れると考えるむきもあるようです。近頃のお母さん達は大分違って来ているように聞いては居りますが、それでも、こと政治の事となると自分とは関係のない事のように思い、あちらの後援会、こちらの後援会、と町ぐるみ男の人達と義理で騒ぐ事だけが政治とのつながりと思っている人達も多いようです。そして肝心の投票日に棄権をする事を平気で話す人のいるのに驚かされます。

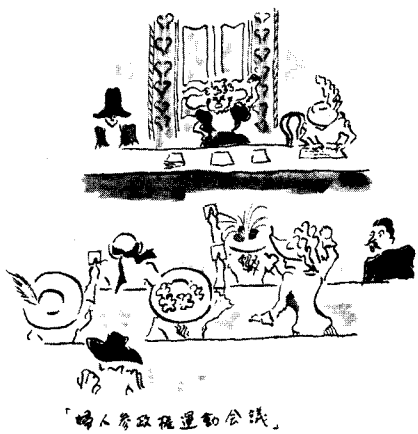
又、女の悲しい性（さが）といえましょうか、女は女の足をひっぱるのです。同性である事で非常に厳しく相手を批判し、容赦しないのです。このような傾向は男性達に「やっぱり女はだめだなあ」と言わせる原因にもなるのではないでしょうか。

イギリスにサッチャー女史、インドにガンジー女史がいるではありませんか。もっと心を広く持って有能な女性をどしどし女性自身が育て上げるべきではないでしょうか。又、家庭に於て女の子を育てる姿勢にも非常に大きな問題があると思います。その他いろいろの原因がある

一八六七年、哲学者、ジョン・スチュアート・ミルは、イギリス議会にこの不公正是正のため、婦人参政権を提案。

一九四対七三で否決されました。

そこで女がみずから参政権をかちとろうという、女のための、女による運動は「人類の半数のうぬぼれに対する、もう半数からのアピール」（ウィリアム・トンプソン）として、このころから組織的に行われるようになりました。



「婦人参政権運動会議」

運動の中心となり、もっとも先鋭的であったのは、イギリスの婦人です。

と思いますが、とにかく本当に悲しい現象ではありませんか。婦人評論家の皆さんがいつも声を大にしていっています。男性の政治家達は親身になって女性の幸せを考えてはいないのです……と。

この際、皆さん、イデオロギーを超越し、本当に女性の事を思い女性の地位向上と幸せを願う代表としての婦人議員を一人でも多く議会に送るよう努力しようではありませんか。夫を子を戦争に奪われた女の悲しみ、物価高による生活の苦しみ、保育所の少ない悩み、進学競争の悩み、等々、一つ一つあげればきりがありません。このような生活に密着した悩みは女性の方が切実にわかるのです。政治というと遠い世界のことのように考えないで下さい。すべて政治によって私達の生活は動いているのです。政治は議会で議員さんの多数決の意見によって動かされています。いかに私達の選挙権が大事なものであるか考えていただきたいと思います。

女の代表を多く議会へ送りたいといっても決して榎美佐子さんのような人をすいせんしているのではありません。私はあの人のように男を敵だなどと思いません、男女同権をふり廻すわけでもありません。人間として同じように幸せに……と願っているのです。

勉強不足で自分の気持ちが思うように表現出来ません。前後のつじつまもあっていないかもしれません。でもどうしてもこの機会に日頃考えている事を書いて見たかったのです。

大きな力を感じる時

小沢磯子（北区）

世はあげて、これらの運動する婦人を非難し侮蔑しました。「女はしとやかに家庭にあり、家事・育児に専念すべきだ」と。男ばかりか、女もそういったのです。

孤独な、無援の闘士たちは、過激な戦術に走りました。

彼女たちは首相官邸の鉄のかき根に、鎖で体をしばりつけ、カギをかけて、そのカギは仲間に持ち去ってもらいます。それから大声をはり上げ、「婦人に参政権を与えよ！」と連呼する。

かけつけた警官が、鎖を焼き切って逮捕するまで、叫び続けられるというわけ。

昭和四十七年に私の義姉（兄の妻）はスモン病の為六十八才の命を落してしまった。

その二、三年前から腸の工合が悪くてずっと息子の出た医科大学附属病院に通院し、薬を常用していたのだが、次第に足の裏のシビレを訴え、歩行も思うようでないと云い出したので、家の者も驚いて直ちに入院、治療に専念したが、病状も大して進行する訳でもなし、かと云って快癒の見込みも立たないままに経済上の事情もあって半年位で退院したが、やはり自宅療養では周囲の者も大変（食事の事はさておき、立居振舞に必ず手をかさねばならない）なので、三ヶ月の後また入院となり、とうとう入退院を繰り返しながら、歩く事は全く不可能で視力まで失われてしまった。

そして罹病三年目の秋半ば、自分の病名さえ解らないまま、義姉は死んで行った。

はじめ、まだ盛んに足のシビレを訴えていた頃、私は何かで読んだ「スモン病」の事が頭に浮かび、姉の病気に似通っているので、甥（大学病院でインターン中）に、貴方のお母さんの病名はスモンじゃないのと云ったら、顔色をサッと変え、まだ厚生省でも医療機関でも検討中だからそんな事を絶対に口に出してはいけないと強く叱られた。

私は、どうしてそんなにきめつけるんだろうと不満だったが、すぐ反省して、なるほど、素人考えを本職に言い出すことなど恥をかくのが関の山、とそれきり再びこの事は口にしなかった。然し、姉の死亡診断書には、ハッキリとスモン病と書かれてあった。

然し姉の死後一年位たった頃からスモン病の事が世論にたかく取りあげられ、同病者の団体も結成され、犠牲者に対する補償問題が政府並びに薬業者に対して訴訟に持ち込まれ現在に至っているが、示談派とあくまで法で争うという二派に分裂、未だに解決に至っていないらしい。

そんな事をニュースで耳にしながら、私は暗然とする。

まだ世間でもそれ程騒ぎたてなかった頃（何年頃に当るか私にははっきり解らない）、この病気について厚生省や薬の製造業者がその原因（キノホルムの害）に気づいて何らかの手が打たれたなら、姉も死をまぬがれたかもしれないし、他の

一九一三年六月のダービー競馬に、エミリー・ディビスンという婦人が現われて、走ってくる馬の前に身を投げました。

「婦人に参政権を！」と叫びながら。

それはたまたま国王ジョージ五世の持ち馬でした。

彼女の遺体を墓地へ運ぶとき、多くの婦人たちがつきそい、大きなデモ行進となりました。

彼女たちは命がけで闘い、過激さはエスカレートしていきます。議会前広場での警官との大乱闘、（二百人もの逮捕者）鉄道の駅を焼き、爆弾をしかけ……。

多くの犠牲者も出さずに済んだのではないだろうか。その手を打たなかったところに何かの力が働いていたのではないだろうかと。

あの時見せたきびしい甥の表情からも察しがつくような気がしてならない。

政治的配慮か、薬業者の圧力か、それこそ門外漢の私などに解る術はないが、あの時フッと心の片隅にこだわって残ったしこりが私をこんな風に迷わせる。或いは私の思い過しかもしれない。しかし今でも何か割り切れない感じが頭をかすめる。

私と政治

――身近かに感じた政治の力――

樽角輝子（板橋区）

今から十数年前、社会福祉施設と名のつく所はどこも財政困難でひどいものだった。私が働いていた民間の精神薄弱児施設も、ただただあの子供達をかわいいと思う職員で辛うじて保っていたようなものだった。働く職員の給与は中企業へ勤めた友人の完全に半分で、労働時間は一日十一時間びっしりと働きづめ、当直は月に一週間の割合、ただほとばしる情熱だけがギラギラしていたようだった。職員がそんな状態であったから結婚して妻子を養える筈もなく、従って男子職員は独身の人が一、二名というアンバランスの状況だった。又、処遇を受ける子供達は物質的に恵まれず、更に人手不足の中で児童憲章にうたわれた文句がそらぞ

これらの運動家は、サフレッジ（婦人参政権）という言葉から、サフラジェットとよばれました。

エムリン・パンカースト

サフラジェットの代表選手、エムリン・パンカースト夫人は、クリスタベル、シルビアの二人の娘とともに、もっとも大きな組織をひきいて闘い、逮捕されればハンガー・ストライキに訴えました。ウインストン・チャーチルに、犬用のムチでなぐりかかったサフラジェットもあります。

らしく感じられるような子供達には本当にすまないものだった。

途中、必要があって一時退職し通学したが、時あたかも東京オリンピックの年、ゼミの帰途など代々木のオリンピック施設の工事現場を通る毎に、これにかけるほんの何分の一かのお金があれば施設の子供達がもう少しましな生活ができるのに……と思ったものだった。

その後高度成長の波にのり、徐々に表面的には国民生活が向上しはじめたが、社会福祉施設はまだまだ数歩の遅れを感じる恵まれぬものだった。何よりの証拠に「大変なお仕事で、えらいわね——」とうれしくない賞賛をいつも言われていた。

ある年の都知事選、是が非でも革新都政へという動きが高まり革新都知事誕生、更にその目玉人事としてNHK解説委員より抜擢された、女性の民生局長が誕生、その局長が全く前向きの姿勢の方で目に見えて民間の福祉施設（少くとも私の働いていた精神薄弱児の施設は）は向上してきた。民間の施設側の要求は、お役所仕事にしては急テンポで受け容れられ、それに伴う予算措置の裏付けがなされ、そこで働く職員の給与は公務員並みとなり、職員定数が増え（ということは、子供達によりよい処遇が出来るということなのです）子供達に必要なものはほとんどもとめられるようなった。

職員の男女のバランスもまずまずとれるようになった。

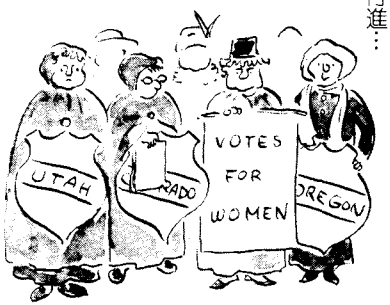
これらの事は、一民間施設の中で働いていた、政治的なことには本当に意識の低い一職員が感じたことである。保守政治はだめで、革新政治でよくなった、などと短絡的なことを云うつもりは毛頭ない。しかし、文明社会が発展する途上で必然的に要求される社会福祉への関心の高まりと、革新政治との相乗作用の結果と思われるのである。全く政治色と関係ない所で生活していたようでも、大いに政治にかかわっていたのだと痛感させられた。

我々の日常生活も、高度化、多様化してくると共に生活に直結した小さな事柄一つ一つに政治のあり方がかかわってきており、よく血の通った行政を……と叫ばれるが、最も大切なことは、人間が人間らしい心で隣人と接し、社会生活が出来ること、それを可能にするのが本当の

しかし運動は、次第に過激派だけのものではなくなっていきます。

多くの組織が地道な活動を続け、その影響力が強まるとともに、運動の方法自体もかわっていきました。

街頭演説、アメリカ全土徒歩旅行のデモ行進…



「いくかーたち」 1913年

政治なのではないか。政治はあくまでも安心して生活できる「うつわ」、それに血を通わせるのは我々人間なのだ。政治はもっと謙虚でなければいけない。そして小さな一人一人が政治を支配しなければ……ああ、又観念論になってしまった。

現実は、きびしい！

男でも女でも指導者は指導者

——対話その三——

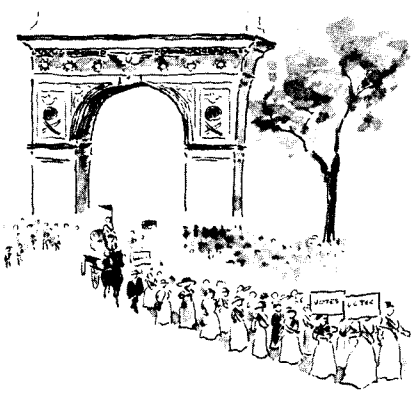
谷崎正子（千葉県）

女＝インドのガンジー首相が総選挙に敗退したと思ったら、イギリスでは保守党党首サッチャー夫人が次期首相の呼び声高くなってきたとか……

男＝あの人は女優にもなれそうな美人なんだねえ。来日の時のテレビを見て感心したよ。大英帝国に才色兼備の女性首相が誕生すれば君たちも大いに意を強くする、というわけだろ？

女＝マスコミや一部の女性議員などの中にはそんな風に浮かれてる向きもあるようだけど、女性が首相になったからといってどうということはないわよ。サッチャー女史自身も、離日前の記者会見で、「男でも女でも指導者は指導者。政治家は男性のためとか女性のためとかいうのでなく、選挙民の代表だ」と云ったそうだけ

一九一一年、アメリカで、低賃金女工を詰め込んだ、危険な建物が火事を出し、一四六人もの女性が焼死したことから、虐げられた女を救うものは参政権であるとの主張がさかんになり、大きなパレードが計画されました。



1912年 ニューヨーク

一九一二年、ニューヨークで行われた大パレードは、まことに華々しく、力の結集をしめしました。

デモが警官に追い散らされると、人びとはむしろ婦人たちに同情するようになってきたのです。

ど。女性政治家は女性の利益代表みたいなことを言って票を集めようとする傾向が、日本ではどの政党にもあるみたいだけど、考えてみればそれはおかしなことよね。

男＝でも女性政治家や女性高級官僚が増えるのは、女性の地位向上のために喜ばしいことじゃないか。

女＝政治家や官僚の中に女性の数が増えたというだけで女性解放が進むと単純に喜ぶわけにはいかないわ。ただ言えることは、政治家や官僚になりたいのに、女性だという理由だけで規制されたり、有形無形の妨害を受けたりすることがなくなって、女性でも努力さえすれば自分の意志が生かせるという意味では本当によいことだし、それだけ女性解放が進んだとも言えると思う。

だけど、政治家や官僚や企業の管理職が、女性だということだけでニュースになるのは、まだまだ遅れている証拠よ。サッチャーさんだって、女性だからと特別扱いしてもらいたくないと言ってるそうじゃない。

男＝そうは言っても、実際は彼女は女性であること、更に美人であることを最大限に利用していると思うね。彼女がいかに切れ者でも、男なら、同じ位の切れ者は大勢いる、その一人にすぎない。それが美人の、女性だとなれば、いやでも目立つからね。女だからこそ今の地位を獲得できたともいえるんじゃないか？

女＝それは事実かもしれないけど、だからといって特別扱いしてほしくないというのは、やはり本音だと思うわ。男性の政治家だって美男なら、選挙の時など最大限にそれを利用するでしょうしね。カーターさんみたいに歯並びに自信があれば、歯をむき出しっぱなしで選挙に勝っても、誰もそれを非難することはできないわ。要するに、男か女かというのは、その人間が持っている特徴の一つにすぎないのよ。男か女かということにこだわりすぎると、問題の本質を見失ってしまう恐れがあると思うの。女性解放というのは、女性が女性であるという理由で、解放されることをめざしているみたいによく誤解されるけど、本当は逆なのよね。人間

一九〇七年、フィンランドで世界最初の婦人参政権が実現し、一九一〇年、アメリカの六州が住民投票の結果婦人に選挙権を与え、ついでデンマーク、オランダ、革命後のソビエト・ロシア、一九一八年にようやくイギリス（ただし三十才以上）、一九二〇年にアメリカ全土、オーストリア、ハンガリー、チェコ、ポーランド……ヨーロッパのほとんどの国で、一九二三年までに、選挙権が与えられました。運動の中心であったイギリスで、二十一才以上のすべての婦人が選挙権を得たのは一九二八年。

誰でも、男とか、女とか、五体満足とか、障害があるとか、持って生まれたどうしようもないものによって自分の人生を始めから規制されてしまうことを、できるだけなくしていこうとするものなのよ。貴方は男、私は女。それは厳然とした事実で、無視したりごまかしたりする必要は全くない。でも単にそれだけのことなのだ——という認識が徹底すれば、別に女性が首相になったり社長になったりしなくても、女性解放は達成されると思うわ。

男＝それだけのことだとは言っても、女に生まれれば、結婚、育児という問題が当然おこってくるだろう？仕事か家庭かという板ばさみで悩むのは女性だよ。

女＝仕事か家庭か——という二者択一は、実は男性が作り出した、言わせてもらえばナンセンスな設定で、多くの女性は知らない間にそれにのせられて、悩まなくてもいいことを悩んでいる、と私は言いたいわね。いい保育所がみつからないなど、育児のために仕事を中断すると、「やはり家庭とは両立できなかった。挫折した」とか、「いやいや母性の勝利だ。やはり真に賢い女はこうでなくちゃ」とか周囲で騒ぎたてるでしょ。女性解放論者の中にも、そういう男の論理に取りこまれてしまってる人がかなりいるみたい。そんな騒音に負けないで、女はもっとしたたかにならなくっちゃ。

「君も共働きで頑張っていたけど、子供が生まれたらやっぱり家庭に入ったね」と言われるたびに言ってやるの。

「いいえちょっと休憩してるだけよ。ゆっくり育児にいそしんで、そのうちまた何か始めますわ。御心配なさらなくても休んだ分は、貴方がたよりずっと長生きして取り返しますから。何ですってね、男は女より腕力はあるけど、同じ体重の男と女が、同じ量の血液を失うと、男の方がずっと早くまいっちゃうんですってね」なんて。イヤーな気分になってきたよ。君みたいにタフな女性が、家庭に入りっきりになってしまうのは、たし

婦人はただ選挙権をかち取っただけではありません。

運動と並行しておこった変化は、女の教育程度が高くなり、工場や会社や、あらゆるところで、働く女がふえたことです。

社会進出は運動を進め、運動は社会進出をすすめました。

「ヴォーグ」誌　1926年

ところでこれまでの画で、過激なサフラジェットまでが、優美できゅうくつな、大げさな服装をしていることにお気づきでしょう。第一次大戦後、この面でも女は解放されました。コルセットからも、大きなまげや帽子からも……。

かに勿体ないよ。ま、せいぜい頑張って下さい。

女＝またまた文句をつけて悪いけど、能力のある女性が家庭に埋れるのは「勿体ない」から女性を家庭から解放しようというのは大変おかしいわよ。それは能率主義に毒された差別思想というものですよ。私はねえ、男も女も、いくら能力があったってそれを別に誇示したくない人はどんどん「埋れる」べきだと思うの。GNPは下がるかもしれないけど、その方が楽しい社会になるはずよ。今の社会は、官庁も会社も学校も、「より速く、より強く、より高く」でしょ。「より楽しく、より面白く、よりイキに」と、どうしてこうならないのかしら。

前、ベティ・フリーダンの「新しき女性の創造」の抄訳を読んで、いろいろいいことも言ってると思ったんだけど、一つ気になったことがあるの。フリーダンは、家事、育児の負担が女性の社会進出を妨げているというの。そして、「ある調査の結果、家事労働は精薄者に適していることがわかった。」と書いているのよね。私はここを読んだ時、ああこの人は女性解放を叫びながら男の論理に取りこまれてしまっているな、と思った。精薄にさえできる家事なんかの為に女性の進出がはばまれている!?どうして、家事は「精薄の女性でもやることのできるすばらしい活動だ」という風に考えないのだろう。フリーダンは男と女を同列にはするものの、男女をそれぞれ半分ずつ「優者」「劣者」に分けるつもりだろうか。そして「優れた」男女が社会に進出してその能力を発揮し、「劣った」男女が家事労働にあたってそれを支えていればいいというのだろうか。まさかそうではないだろうと思ったけど、私はフリーダンのその一言を読んで、女性解放運動というのも難しいもんだなあとつくづく考えさせられたんです。

男＝「男でも女でも指導者は指導者」というサッチャー女史は、その辺のところはどう考えているのかな。

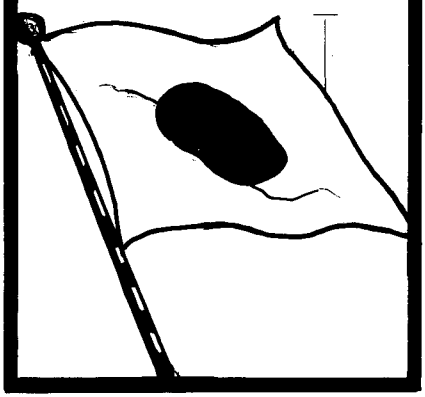
わが国ははなはだおくれました。
ごく少数の、知識婦人の運動はあったものの、多数の力を結集することはできませんでした。
わが国の女性にとって、参政権はアメリカの空から降って来たようなものなのです。

けれども、欧米のそれは百年の運動の成果であり、涙と挫折の結晶です。
これから問われるのは、選挙権の内容と質であり、わが国の女性も、そのあらたな運動の戦列に、加わっていきたいものです。

（和田好子）

君が代通信——その二

亀山利子



「あおげば尊し」の昔ながらのメロディーが流れ出すと、父兄席のあちこちでハンカチがうごく。明治期以来、なん世代にもわたって、きまって卒業式に流れてきたこのメロディーに、反射的にセンチメンタルな反応をおこすのは、今日の主役の卒業生よりも、いつも親たちの方である。

天皇制教育のもとで日本人は、思想だけでなく、情緒まで統一されてきた。情緒までとりこまなければ、完全な精神動員にはならないからである。

はじめて「臣民」という言葉があらわれたのは、明治十四年の国会開設の詔勅だった。「国民」ではなく「臣民」、SUBJECT。つまり国家の主人としての国民ではなく、国家に従属するものとしての国民。国家権力といえども侵すことのできない人間固有の権利(基本的人権)を、主張することなど思いもつかない、いや、そういう行為をみずから悪と感じるような「臣民」、を作りあげるには、「幼少ノ始ニ其脳髄ニ感覚セシメテ培養スル」のが肝心なのであった。

だから、戦前の学校教育の中に、儀式はやたらに多い。そもそも学校の式は、三大節(一月一日、紀元節、天長節)から始まった。が、その演出効果の絶大さゆ

「君が代」が国歌で何がわるいの？どっちだっていいことでしょ、という声がきこえてくる。

本当にどっちだっていいことだろうか。

私たちの生活に直接関係がなさそうに見えることは、ホントにどっちだっていいことなのだろうか。

昭和四十九年五月、わいふ一二六号で、亀山利子さんは、君が代の斉唱を公立学校の卒業式にとり入れようとする校長のゴリおしを、一教員としての体験を通して、生々しく描き切った。

「今は私のおねがいだけだか、これで条令にでもなったら大変ですよ」

哀願とも、威嚇ともつかぬ校長の言葉が、三年たったいま、現実のものとなっている。

戦前の日本を知る人が、君が代の復活にこれほどの危機感を抱くことが、根拠のあることか、ないことか。二回にわたり、君が代通信読篇をみなさまにお届けすることにした。（120号の君が代通信ご希望のかたは、コピー代十送料400円、振替でお申込み下さい）

えに、しだいに卒業式(卒業証書授与式)入学式、始業式、終業式、開校式……さらに、教育勅語奉読式、陸軍記念日儀式などと、ふえてゆく。

明治二十四年、文部大臣は勅令にもとづいて、「小学校における祝日大祭日の儀式に関する規程」(略称、儀式規定)を発表した。全国津々浦々の学校は、必らず、以下のような儀式をおこなうよう法的に強制されたのである。

㈠御真影の拝賀(天皇陛下及、皇后陛下ノ御影ニ対シ奉リ最敬礼ヲ行ヒ且、両陛下ノ万歳ヲ奉祝ス)㈡勅語奉読㈢勅語についての校長の訓話(天皇の尊さ、かたじけなさについて語る)㈣唱歌。

この時から、君が代は全国に普及しはじめた。粛々と、天皇のかたじけなさを情感でうけとる演出効果をさらに高めるために、明治二十六年(一八九三年、日清戦争の前年になる)には八篇の歌が指定されている。

「君が代は、千代に八千代にさざれ石の、巌となりてこけのむすまで」

「年のはじめのためしとて、終りなき世のめでたさよ。……」(一月一日)

「雲にそびゆる高千穂の、たかねおろしに草も木も、なびきふしけん大御代を、あほぐ今日こそたのしけれ」(紀元節)

「今日のよき日は大君の、うまれたまひしよき日なり」(天長節)などである。

卒業式も、卒業のよろこびや、新たな出発の表現としての行事ではなく、この天皇教の儀式の中にくみこまれてゆく。来賓をひきいて校長着席、一同敬礼、君が代斉唱、勅語奉読と敬礼、卒業証書授与、校長訓話、送辞、答辞……という形式は、すでに明治三十年頃に確立している。これから、勅語奉読をぬかし、それに校長先生のお話、送別のことば、卒業生のことば、と表現をかえれば、今も多くの学校で行なわれている卒業式に、この形が生きている。大日本帝国が、今の憲法をもつ日本国になっても、蜿々と同じことをつづけている。フシギナ国民、ワタシタチ日本人。

「卒業式には、君が代を必らずうたわせたい。そのことによって、生徒たちに愛国心を養いたい」

と、毎年一月か二月になると、校長は口火をきる。

「天皇をたたえる歌である君が代を、卒業式にうたわせるのは反対です」

「いや、君が代の君は、天皇ではなく国民のことです。この君は、英語でいえば、二人称、YOU、あなた、です。天皇をたたえる歌ではなく、国民の繁栄をたたえる歌なのです」

「私にとって君が代は、とても重苦しいいやな思い出につながります。昭和十七年、私が小学校二年の時、父は北支で戦死しました。当時は「誉れの遺児」ということで、校長先生からも特に声をかけられ、「米英が敵(てき)、大きくなって敵(てき)討ちせよ」と励まされた憶えがあります。私の小学校教育は戦時教育一色で、君が代、日の丸、それに教育勅語の中で育てられてきたわけです。

そのようないまわしい役割を果してきた君が代を、今、なにくわぬ顔をして生徒たちにうたわせるのは、私はいやです」

「いやです、という感情論は困る。個人の良心にもとづいて教育をやるということには異論があります。公教育は、平均的なものを平均的に与えねばならぬ」

「ちょっと待って下さい、校長さん、卒業式は国家行事ではありませんよ。日ごろ慣れ親しんでいる校歌をうたうことで充分ではありませんか」

「いや、国民感情からはなれたものなら、私はこんな問題提起はしない。昭和五十一年一月一日の東京新聞の世論調査によれば、君が代に反対している人たちは、わずか三パーセントです。たった三パーセントに属する人たちがこの職員室に多いのは、非常に、残念です」

「卒業式に出席する父兄の中にも、親や兄弟や自分の戦争体験をもっている人たちがいるはずです。君が代をうたわないことで傷つく人はいないけれど、うたうことによって暗い痛みを感じる人たちがいるはずです。せっかくの卒業式です。教育の場で、それは少数の人だから、ときりすてるようなことをしてはならないと思います」

「反対する人たちは戦争体験にこだわっているようだが、戦争の思い出に対する国民感情は、すでにうすらいできています。戦争体験をのりこえて、もっとひらかれた日本人にならなければならない」

そのほか、各地での校長の発言をならべてみよう。

「所属感が大事です。学校に校旗、校歌があるように、国旗と国歌で、国家に対する所属感を高めなければならない。子どもたちは日本人、日本に属しているのだから。世界中どこの国をみても、その国家に対する所属感、義務感を育てていない国はない。特に卒業式のような機会に、その点を呼びおこす必要がある」

「君が代は、世界のどの国歌と比べてみても、平和なものである。フランスの国歌の、〝悪魔のごとく敵は血に飢えたり〟〝あだなす敵をほふらん〟ソビエト国歌の〝攻めくる敵うちやぶり〟〝勝利のためすすめよや〟イタリア国歌の〝つるぎとれ、いのちささげん〟などの語句とくらべれば、君が代がいかに平和的であるかが、いっそうはっきりします。

本来の意味にもどせば(君が代の君を、天皇と考えることをやめれば)、人間尊重の精神にぴったりしたもので、まことに平和的で民主的なものです」

「どんなに反対されても、私はやります。こういうことは多数決できめる問題ではない。職務命令とうけとってもらって結構です」

紙数の関係で、私たちの反論をもっとのせられないのは残念だが、とにかく、多かれ少なかれ以上のような論理で、校長たちはがんばる。かくして、都内の小学校の九〇パーセント、中学の七六パーセント、全日制高校の三五パーセントで卒業式に君が代はうたわれる。もしくは、メロディーだけのレコードが流れる。(昭和47年度の数字だが)

この数字の中には、数時間、数回、あるいは数日にわたる激論の結果の学校もあるし、ひとことも異論をとなえる余地のない、「例年通り」の学校もある。勇気を出して異議をとなえたら、「なんだ、お前たちなにをいう!」と一喝されて終りの学校もあれば、教員の間に不必要な感情的な対立がうまれ、日々の教育活動にマイナスが出ることを避けるために、レコード演奏で妥協して、この問題を軽くいなす学校も含まれる。

君が代をうたわせることができないような校長は、上から管理能力なしとみなされるらしい、といううわさは、かなり広くあった。そうでなければ、恥も外聞もなく、各校の校長がそろいもそろって、「けして上から言われたのではありません。私自身のかたい信念であります」と、職員室で奮闘するはずがない。

今年もまた校長先生たちは、「指導要領で国歌と定められたからではありませ

ん。私自身のかたい信念です」と、くりかえすのだろうか。

校長のうしろには文部当局がいる。文部当局の背後には、日本の保守層がいる。校長や文部当局や、日本の保守層は、なぜ、これほどまでに君が代にこだわるのだろうか。

昭和四十九年六月、当時の首相、田中角栄は、こう語っている。

「わが国がかかえている問題は多岐にわたっているが、中でも一番大切なのは教育である。私は教頭法を成立させた。『君が代』を国歌として歌うことをよしとしない先生がいっぱいいる学校で、教頭が職務を執行するには法的根拠がいる」

また、「君が代は国歌なり」とする新学習指導要領集が発表された。この六月八日、福田現首相は、こう語る。

「日の丸を国旗として掲げ、君が代を国家として堂々と歌えるような教育を確立し、国家への忠誠心を養うような教育をしたい」（傍点、筆者）

（以下次号）

お知らせとおねがい

まだ梅雨のあけやらぬ七月の始め、「わいふ」編集部ははじめての公開編集会議を持ちました。参加者十名。議論に花の咲いた数時間でした。

この会議の結果、「わいふ」の将来にとって重要な方針がいくつか定まりましたので、紙面をさいておしらせ致します。

I　「わいふティーチイン」の再構成の必要。云いっ放し、書きっ放しの議論が多く、折角よいテーマがでても尻きれとんぼの感が深い。

今度は二号あるいは三号つづけて一つのテーマを追ってみる。女の生活に関係のふかいテーマをとりあげ、アンケートや誌上ティーチインで問題を掘下げ、新しい理論や具体的解決策を生みだし、できれば行政に反映させるところまで(!!)持って行きたい。

II　投稿者の年令を知りたいという思いがある。いちいち年令を明記することへの抵抗もあるが、若くても年取っていても「わいふ」は「わいふ」

差支えない限り、今度は投稿者の年令を明記してほしい。（もちろん強制ではありません。）

III　最近、投稿の量がふえてきて、限られた紙面に収容しきれなくなった。次号まわしにしたりして何とかやりくりしてきたが、これも限界にきたかんじ。何とか一人でも多くの投稿を掲載するにはどうしたらよいか。討議の結果。

イ、　字数制限を二千字から千二百字にひき下げる。

ロ、評論的な内容のものはこれまでより精選主義で行く。例えば同じような内容のものは一本にしぼったり、抽象的な一般論はなるべく避けるなど、ある程度選択して行きたい。（これは文の上手、下手で選ぶということとは違いますので、これまで通り気楽に投稿して下さい。「わいふ」はみなさんがいないと出来ない本なのです！）

以上の決定をふまえて投稿規定を手直し致しますが、投稿誌としての「わいふ」の基本的性格には、少しも変りはありません。紙面の許すかぎり一人でも多くの方の投稿をおのせして行きますので、どうぞよろしくお願い致します！

編集部

お能のみかた・たのしみかた

お能拝見（Ⅲ）

――霊の女――

和田好子

■貴船川のほたる火

ある男に忘れられていたころ、という詞書（ことばがき）がついて、

もの思えば　沢のほたるもわが身より　あくがれ出づる魂かとぞ見る

という歌があります。多情多恨の女、和泉式部が貴船神社に詣でての詠ですが、そのあくがれ出た魂は、相手の男のもとにいき通ったのではないか。

男が夜更けにふとめざめると、枕の方に美しい女の姿が幻に結ばれ、彼は貴船の谷川の水を浴びたように、ぞっと総毛立ってとび起きる……。

私がこの歌について、こんな想像をするようになったのは、お能の「鉄輪」を見てからなのです。

そのとき、私はお能を見はじめてまだ日も浅く、たしか三度めの観能ではなかったかと思います。

ところは今も健在の水道橋能楽堂、椅子席の近代的な舞台で、当時大きな能会はたいていここで催されました。

演ぜられたのは喜多六平太の「鉄輪（かなわ）」。六平太は喜多流の家元で、このときたしか七十八才でした。

私はこの人が一世の名人であるということも知りませんで、ただある人から切符をもらい、ふらりと見に行ったわけなんですが、まず貴船の宮に仕える神主が出てきて、

「このほど都より、丑の時詣（うしのときもうで）する女の候が」

その女の望みを叶えてやろうとの神のお告げがあった。今夜もやってきたならば、お告げを伝えようという。

件の女が登場してきます。

六平太という人はたいそう小柄な人で、五尺ようようだったのではないでしょうか。大柄な人のふえてきた当今では、ちょっと見られない小さな男で、舞台に立ったとき、奇異な感じがすることがありました。

ましてこのときははじめてですから、揚げ幕から出てきたのが、何か人間でないような印象で、びっくりしたものでした。

このシテ（主人公）の女は、橋がかりに立って、とぎれとぎれに、低い声で謡をうたいはじめましたが、それは、

〽二道かくるあだ人を、頼まじとこそ思いしに、人のいつわり末知らで、契り初めにし悔しさも……、

という、恋人の裏切りを恨む独白なのです。

うたうというよりはしゃべるという感じの謡で、低い声にもかかわらず、詞章がハッキリとききとれました。

この六平太の特徴ある謡は、日本語という言語が、かつて語れば音楽であり、書けば詩であったということを証明しているように思われますが、そのときはまだそんなことはわからない。ただふしぎな謡だと思ったばかりでした。

扮装は、泥眼（でいがん）という女面、これは白眼の部分を金色に塗ってあって、嫉妬する女の恨みと涙とをあらわしているのです。着ているのは水衣（みずごろも）といって、薄い短い衣を、着附（きつけ。小袖のこと）の上にはおった姿でした。そして黒い塗り笠を手にしていました。

彼女が舞台に入って、見所を正面に見てすわる、私は前のほうの席に陣取ってじっと見ておりましたが、それは何とも異様な雰囲気を持った女で、これから何が始まるか、不気味なものを期待させて目を離すことができないくらいでした。

さてさきほどの神主が、女をみつけて、

「いかに方々、当社よりのお告げには、思う望をお叶えあるとのご託宣にて候」

そのお告げとは、三つ足の鉄輪（ゴトクの古語）をさかさまに頭にいただき、その三つ足に火をともし、赤い衣を着、怒る心を持てばそなたの望みは叶うであろう……というもの。聞くうちに女はじりじりと体を神主のほうへ向けていく。神主はぎょっとなり、

「や、か様に申すうちに、お顔の気色がかわり恐ろしうなった。恐ろしや恐ろしや」

と、逃げていってしまいます。

女はおもむろに立ち上る、思い入ったように面をうつむけ、

シテ〽これはふしぎの御告げかな、まづまづわが家に帰りつつ、神託のごとくなるべしと

と謡えば、続いて地謡（コーラス）、

地〽いうより早く色変り、気色変じて今までは、美女の容と見えつるが、みどりの髪は空さまに、立つや黒雲の雨降り風と鳴る神も、思う仲をば離けられし、恨みの鬼となって、人に思い知らせん、憂き人に思い知らせん。

この地謡の間に、女は黒塗りの笠を頭上にかざして、舞台を一巡したのですが、そのとき私は、たしかに怪異を見たのでした。

こうこうと電燈の照明にてらされた舞台が、ちょうど夕立の直前のように、さっと暗くなったのです……。

それは気のせいには相違ない。あらゆる芸術は、創作者と鑑賞者の合作であり、鑑賞者の想像力によって、創作そのものが千変万化するということはあります。

しかしその想像の飛躍を促がす力は、やはり創作者の側にあるので、それがなければこういう怪異は起らない。

陰々と暗くなった舞台に、女が黒塗りの笠をたたきつけるように落すと、その音は雷のようにひびきわたる……瞬間、囃子（ハヤシ）も謡も一時に止んで、しいんとしづまり返ったなかを、彼女はまるで宙を歩いてでもいるかのように、するすると退場していきました。

これが前場（第一場）で、後半（第二場）では、女が「炎の赤き鬼」となり、裏切った男をとり殺しにくるところを演じたのですが、なんとも怖いお能でした。

■あくがれ出づる魂

六平太の「鉄輪」は、私がお能にのぼせ上る大きな一因となったのですが、「鉄輪」のみならず、「道成寺」「葵ノ上」など、女が恋の恨みのために、人間性を捨てて鬼や蛇や、霊と変じ、男に祟るという話がいくつかあります。

祟るというのはもっとも極端な場合ですが、どうもお能の中の女の心は、ややもすれば日常・現実の次元を超えて、ふらふらとさまよい出る傾向があるのです。

今でこそ女は現実的なものと相場がきまっており、家の中にどっしりとお尻を下ろして、夢も希望も家計簿と相談の上というありさまですが、中世の女だってものを食べずに生きていたわけではなく、その証拠は「柏崎（かしわざき）」「桜川（さくらがわ）」などという、深刻な生活苦のお能に如実に表われているにもかかわらず、彼女たちは現代のわれわれより、ずっと霊的でありました。

愛情や信仰によって心が高揚しますと、彼女たちは異次元の世界を見、ふしぎな言葉を語るのです。

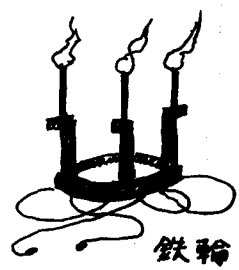
このごろ広く世に知られるようになった邪馬台国の女王卑弥呼、彼女は鬼道に仕えてよく衆を惑わしたということですが、おそらく太古の日本の女は、男よりも神に近く、神を斎い祭り、神の言葉を聞き、それを伝える存在だったのでしょう。

女に霊異をあらわす能力があるという、広い信仰の流布、つまり、社会的合意があればこそ、卑弥呼の神通力も衆を惑わすことができたに相違ありません。

女王卑弥呼のみならず、女一般にそのような霊力がそなわっていると考えられていたことについては、柳田国男の名著「妹の力」その他の研究がありますが、お能を見ても、それはかなり納得のいくことです。お能の女は、十分自覚した上で、ものに狂うとか、生霊（いきりょう）になるとか、神がかりするとか、霊界と現実界とを自由に往来しているように見えるのですから。

おすすめの名曲の中にあげておいた「蟬丸（せみまる）」は、蟬丸という盲目の皇子と、その姉で「辺土遠境の狂人」である、逆髪（さかがみ）という皇女との暗い運命を描いています。

「心よりより狂乱して、みどりの髪は空さまに生い上って撫づれども下らず」、宮殿をさまよい出てしまう皇女は、現代の常識からすれば精神病というほかないけれども、私は名人梅若実の演ずるのを見たとき、これこそ神下ろしを



する内親王だ、卑弥呼そのものだと感じ入りました。

〈花の都を立ち出でて、憂き音に鳴くか賀茂川や、末白川を打ちわたり……、

という地謡もすばらしく、緋の大口袴に唐織壺折という、おひな様の内親王そのままの華かな装束で、登場した名人の姿は今も目に残っています。

かの名高き道成寺はいうまでもありません。

片思いを裏切られた処女が、誇りを傷つけられ、はずかしめられた恨みから、蛇体に変じて日高川の激流を泳ぎ越し、男をとり殺すという話、当時の男が、女の霊力をどんなに恐れたか、よくわかります。

現在でもその名残りはかすかながらあるようで、真偽はさだかでありませんが、今上天皇の内親王が、さる新興宗教にかかわられて、予言をなさると何でもすべて当るという噂を聞いたことがあります。デマであるにせよ、こういうデマがひろまるのは卑弥呼の伝統が生きている証拠でしょう。

卑弥呼に象徴されるように、日本の女は太古、神と人との間に立つ、尊い地位を占めていましたが、お能が生まれた中世のころには、すでに零落して、男に依存するほかない存在でした。同時にその霊力もおちぶれて、神の言葉を語り一族の歴史を伝えるかわりに、裏切り男に祟ったり、物狂（ものぐるい）という、精神病者とも、旅芸人とも、乞食とも売春婦ともつかないような、ふしぎな痛ましい姿でさすらい出る……そういうものに成り下ってしまったのです。

お能をごらんになるときには、このような異様な女たちを、芸術的虚構としてでなく、当時の現実として見ていただきたいと思います。

今や跡絶えた霊の女、それはおちぶれ果てながらも、往古の栄光を意識下に持ち伝えていて、誇り高く、気高い姿で登場してきます。

無表情の形容に使われる能面、それが舞台ではいかに表情ゆたかであるか、そしてその表情が中世の女の、悲しみと誇りの凝結したものであること……。

このあたりをぜひ心にとめてごらん下さい。

■道成寺あれこれ

道成寺は歌舞伎になっているから、それをごらんになった方も多いでしょう。

歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」はちっとも怖いものではありません。

私は近ごろになって、あの「鐘に恨みはかずかずござる」という「かね」は、鐘ではなくってマネーの意味ではあるまいかと思い付きました。

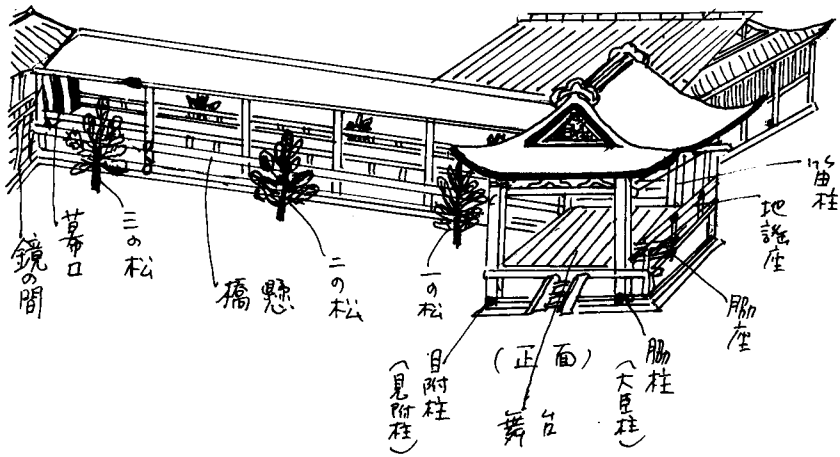
「くるわ育ちははすはなもの」と名告る遊女のものがたりですから、かねをマネーと考えると、なかなか意味深長である。

「初夜の鐘をつく時は、諸行無常とひびくなり」

なんて、いささか書きにくい、あることを想像してしまいます。

つまりこれはお能の道成寺のパロディなんで、下品でこ

っけいなのは当然といえましょう。
お能のほうは名曲中の名曲、お能といえば道成寺、外国人など案内するときには、まっさきに選ばれる曲目のようですが、私がいくつか見た感じでは、期待ほどおもしろくはありませんでした。
これは一つには、年を取った人は演じられないということがあります。
鐘入りは相当なアクロバットで、その前の「乱拍子（らんびょうし）」、「急の舞（きゅうのまい）」、いずれもたいへんな体力が要るそうです。そこである程度年を取ると、舞納めということで以後道成寺は舞わなくなってしまう。
例の喜多六平太は昭和十年に、喜多流の三百五十年記念能で道成寺を演じ、それが舞いおさめであったということです。彼は明治七年の生まれですから、ちょうど六十才でしょうか。
私が見ていたころには、これらの名人たちは皆七十才を過ぎていまして、もはや皆舞納め、誰のも見ることができなかったのです。
桜間弓川のなんか、じつに見たいと思いましたが、もう病気がちのご老体で、しょっ中休演しておられたくらいだから話にならない。
おそらく道成寺というお能は、体力と才能ある若い役者が、青年客気の勇を以て、エイッと大上段に演じた場合に、もっともおもしろいのではないかと思われます。
六平太がはじめて道成寺を舞ったのは十八才だそうです。若い役者連が寄り合い、
「なァに、六平太、六平太というけど、家を建てるときにはまず足場を組んで、よしずっぱりで囲うじゃないか。われわれは今、その足場を組んでるとこなんだ。今によしずっぱりを取り払う。六平太にだって、昔そういう時代はあったに相違ない」
なぞと話していると、側に見巧者のご老人がいて、
「イヤ……六平太にはよしずっぱりの時代なんか、なかった」
といったので、一同閉口したという話を聞いたことがあります。
その六平太が十八才の道成寺、彼は乱拍子を百遍けい古して、演じたということですが、どんなにおもしろかったでしょう。生れて来かたがおそくって、見そこなったのは千載の恨み、やる方なきこそ悲しけれ。
道成寺をごらんになるなら、金春流、喜多流の鐘入りは勇壮で、おすすめいたします。
金剛流と宝生流のはついに見る機会がありませんでしたが、観世流のは見ました。観世の鐘入りはアクロバットとはいえません。いつもあんなおとなしいものなのでしょうか。
金春はもっともアクロバチックだといいますが、鐘というのは竹で骨組みをつくり、絹布で包んで、鉛のおもりを入れたものです。
これを舞台の天井に吊り下げ、綱を笛柱（ふえばしら、能舞台の右手奥にある柱）にとり付けてある鉄の輪に結んでおきます。



さてシテの白拍子（しらびょうし。舞姫。じつは蛇の妖怪）が、乱拍子という、小鼓と気合をかけ合う一種奇怪な舞（蛇が寺の石段をうねり上る表現だという説があります）を舞い、さらに急の舞に入って、いよいよ鐘入りとなりますと、鐘引きはとき放った綱をつかんで身がまえる。

シテは扇で頭上の烏帽子をさっとはね飛ばし、左手をさしのばして鐘にかけ寄ると見る間に、中に吸い込まれるように跳躍する、上からは間髪を入れず、轟然と鐘が舞台上に落ちます。

人は飛び上る、鐘は落ちる。当然衝突してひどく頭を打つそうで、鐘入りのけい古なんて、頭が痛くてたいへんだろうと思います。

それを我慢するのも、芸道に一身を捧げた人たちなればこそでしょうが、この大曲を、ときに長年お能を習った素人が舞うことがあります。素人のお能はもちろん素人だけのおさらい会で演じるのですが、イザ鐘入りというときに、左手をのばして見所の方へ走ったのがいた。師匠が後見をしていて、あわててつかまえ、鐘のほうへ向きを変えさせたということですが、さもなければ舞台から転げ落ちたでしょう。

そんな余興付きの道成寺も、ちょっと見てみたいような気がします。

（つづく）

わいふ情報コーナー

こんなことしてみたい
こんなもの売りたい
こんな本、読ませたい
こんなひと探したい
こんなこと知ってる？
など　など　など……
どんなことでも
みな、どうぞ！

本を出しました

「わいふ」の会員の馬場淑子さんが、こんど講談社から創作絵本「ふしぎなかばん」を出版。森やすじ画伯の絵とともあった、楽しい絵本です。小さいお子さんのあるかた、どうぞ。

古典文学へのお誘い

古典文学を読む、同好の士を探しています。

さしあたり、源氏と新古今からはじめたいのです。当方、ピヨピヨの赤ん坊抱えた新わいふ。

連絡先　木村　澄子
電話（〇四六六）
八一・〇〇四三

知ってますか？

やけどをしたとき、水で冷やしてから、ジャガイモをすりおろしてガーゼにはりつけ、やけどの上にそっとのせます。乾いたら何度もとりかえます。

ヒリヒリした痛みがとまり、火ぶくれがひどくならず、痕がつかずになおること、不思議みたいです。

ぜひためしてみて下さい。

〈親の出る幕〉

樋口恵子さんの本です。

自立できない女の子、生活ができない男の子の、二人あわせて一人前のカップルじゃなく、一人でちゃんと一人前の女の子と男の子を育てたいと思っているかたは、この本を読んでみたら絶対に役に立ちます。

文化出版局のよつば新書。かわいいポケット版の本です。

お料理を募集します！

編集部

早くできて、材料費があまりたかくなくて、おいしいもの。日常たべているもの。

ご自分の家で特別につくる「我が家の自慢料理」というようなものでなく、人に教わったもの、本に出ていたものでも、おいしくて、始終たべているものなら何でも。

いくら何でも、ハンバーグなどというのでは困りますがとにかく手軽にできて、安くて、おいしい、という所に重点をおいて下さい。特別の本に出ていた場合は本の名もかいて下さい。締切なし。

大型熱帯魚用水槽うります！

一度も使ってません。

ニッソーシーパレス、最高級総ガラス製。（さびる部分なし）

寸法・120×45×45（cm）

専用鉄製アングル台つき。

市価六万以上のもの。

二・五万で。

20ℓの濾過用珪砂もさしあげます。

連絡は編集部へ

太平洋の船旅

錦木優子

呉越同舟のクルーズ

お酒に強いか弱いかは自分自身でさえ試してみないと分らないが、同じように船に強いか弱いかも、体験してみないとさっぱり見当のつかないものである。私はここ数年の間に四回、外国航路の船旅をする機会に恵まれた。その中には悪天候のもとでの不運な航海もあったのだが、ただの一度も船酔いを知らないですごしてしまった。これには、われながら驚いているくらい。実をいうと、航空機の揺れには弱い方なので、乗船するまでは酔って迷惑をかけはしないかと、だいぶ気に病んではいたのだ。

外国航路の船旅というと、豪華客船での世界漫遊の旅も含まれるが、もちろん私の船旅はそれとは違う。期間は十一日ないし十三日、横浜—グァム—サイパン—横浜のクルーズで、洋上研修を目的とするものだ。

外航客船を使っての洋上研修はいま花ざかりの感じで、いろいろの団体が年中行事にしている。私がここに紹介する洋上研修クルーズは、青年の為の運動家K氏の主催によるものである。研修船「にっぽん丸」は今年五月のゴールデン・ウイークに、横浜港の大桟橋からグァムをめざして出航した。乗船した五百余名の人々は、他の研修船の場合のように合宿による準備教育などしていない。出航のほんの二時間前に結団式を終えたばかりで、互いに見ず知らずの仲がほとんどである。

団員の出身地は、北は北海道から南は九州まで全国にわたっている。数人の学生を除いて、職業も千差万別。大手企業の勤務者から農民やお手伝いさんまで、実にヴァラエティーに富んでいる。その上、警視庁や県警の勤務者も参加している。年齢もハイティーンから五十代まで、主力は二十代だが、時には親思いの息子が、田舎の六十代の両親を招待したケースもあった。

船内では十二～三人からなる班が行動の単位になっている。班内には警察官あり、総評系組合員あり、同盟系組合員ありで、陸上の立場を持ち出したらトラブルが起きて研修旅行はみじめなものになりかねない。

それに実際、海上での生活には陸上と

は全く別の危険があって、乗り合わせたものが体面にこだわってはいられない場合がよくあるものだ。

危険もさまざま

まず、海がいったん荒れ出したら、一万トン以上の「にっぽん丸」にしても、まさに木の葉のように揺れる。水平線が盛り上がって見えるような荒天下ともなれば、船底をたたく水音が、今にも船体をへし折ってしまうのではないかと思われるほどすさまじい。船室は無気味にギシギシとうなる。気分が悪くてベッドに横になっていても、うっかりすると、ころげ落ちてしまう。なにしろ三人の大のおとなが腰かけているソファーが、そのまま部屋のあちこちに動き回ることさえあるのだから。何回も食堂に出られない仲間のために元気な者は病人食を運び、時には船医の診断を仰がねばならない。

また船酔いならぬ酒の酔いをさまそうと、甲板に涼みに出てつい居眠りするのは危険このうえない。十数ノットで走っている船の甲板上の風はきつい。そこで寝込むのは、扇風機にさらされて寝ているうちに心臓マヒを起こすのと同じ危険性がある。だから船内では、特に夜分は、班の仲間の所在に誰もが注意を払う。

また、青年たちが若い女性研修員の災難を防止することもある。満天の星をいただいた深夜の甲板は、まことにロマンチックである。船影一つない真っ暗な海。水平線のあたりが一番暗くて、中空は星あかりで意外に明るい。若い女性が一人で（禁を犯して）人気のない甲板へ。一方、自発的に警備係をかってでた青年たち——職掌がらとはいいながら、警察官がよく奉仕してくれる——が船内をパトロールする。

このパトロールが時に、若い女性を無用のトラブルから防いでくれるのだ。「にっぽん丸」はわが国では日本船籍の唯一の（！）客船で船員は日本人ばかり。船員の規律はとても良い。しかし、外国船籍の船の場合には異国の船員が乗務して、中には女性にだらしない者もいる。その上、外国の男は一般に女の扱いがうまい。星空の下で女性がだまされる条件は揃いすぎているくらいだ。それに船内では乗組員の居住区は客室とは全く分れていて、いったん船員の居住区に入り込もうなら、船客から全く隠されてしまう。ナホトカ航路のソ連船バイカル号で起きた女子学生の悲劇はその最悪のものだったと思う。

自発的な警備活動の例のように、この研修船では講義をきいたり、討論に参加することだけが研修の目的ではない。何といっても自ら自分の役割を分担し、人に奉仕することによって、新しい体験をしていくのが主な目的となっている。研修団長K氏の「美しい花をみてその根っこを思う者はいない」という言葉が船内に飾られていて、人知れず縁の下の力持ちになることが、少なくとも船内では求められている。権利の追及ばかりさかんで、告発ばやりのこの時代に棹さした、この古めかしい生き方には、素直に心ひかれるものがある。

基地には無関心

ところで、この研修船は、グァム、サイパンの両島に寄港する。横浜を出てから五日目の朝、グァム島に着く。上陸して一日を観光ですごす。グァム観光局の役人の説明では、世界的な不況の影響で観光客が激減し、特に最大のお得意だっ

た日本人観光客が、年間三十万人から十五万人になって弱っているということだった。

グァムではスペイン統治時代の建造物が主として観光の対象になっているようだが、日本人のためだろうか、横井庄一さんが発見されたジャングル附近が名所の一つに加えられているのが、ご愛きょうだった。だが、グァム島といえば、アメリカの西太平洋での戦略拠点としての性格が重要であるはずだ。

太平洋でのソ連海軍力の増大が、日本とアメリカに大きな脅威となってきている時、グァムの米軍基地がソ連に対する戦略抑止力として果たす役割は大きい。観光バスで島内を回っても、ガイドの説明の中に「この先は基地ですから左折」とか「Uターンします」といった断りが入る。そしてガイドは「観光客のために基地の一部を公開するようにという声もあるんですが、今のところ難しい」ともつけ加えていた。しかし、大半の日本人が自国の安全について無関心であるのと同様、研修生たちはグァムにまでやってきても、この重要な基地に関心を示すことはなかった。

サイパンの慰霊碑

前の晩の十時にグァムを出航した私たちの船は、朝には日本軍玉砕の島サイパンに着く。三十三年前に米軍の海兵隊が上陸したのと同じ西海岸に接岸する。いくつかの戦記によれば、昭和十九年六月十五日の朝、いま「にっぽん丸」が浮ぶこの西の海一帯は米軍の艦隊でびっしり埋めつくされていたという。兵力も火器も戦車も四倍以上の米軍を迎え、制海権も制空権も失っていた当時の守備隊員の心境はいかばかりであったかと思いながら上陸する。研修生一同は、十数台のバスに分乗して戦跡に向かう。南の強い日ざしに白く光る道を北に進む。この道路ぞいは、生き残りの日本の将兵と民間人が共に最後のバンザイ突撃を行なった場所で、犠牲者はいまもこの土の下に眠っているということだった。

日本軍最後の司令部跡や南雲、斉藤両中将が自決された洞窟を見る。ガイドは島民で、日本語がうまい。サイパンが日本の統治下にあった時代に、日本語教育を受けた世代である。彼らは米軍の攻撃中、ジャングルや洞窟に隠れて生命を守

った人たちである。だからその説明には真に迫った臨場感があって、いまでも胸に迫るものがある。

しかし、戦争を知らない世代があの時の極限状態を理解するのは難しい。そのズレがあるために、時に日本人観光客が島民ガイドに叱られることがあるという。炎天下にさらされた観光客が「のどが乾いてかなわない」とぼやいたのを老ガイドが聞きとがめて「死んだ日本人も島民も、もっと暑い中を米軍に追われ追われて、一滴の飲み水もなしに徒歩で逃げたんですよ」とたしなめる場面も珍しくないということだ。

多くの日本人が死地を求めて、次々に高い断崖から身を投げたバンザイ・クリフと呼ばれている島の北端には、真新しい慰霊碑が建っていた。この研修生の中から、左官と建築を職業としている有志が先に出発して、立派なヒノキの慰霊碑を建立したのだ。

実はこのヒノキの角材は、大工をしている団員の親方が寄付したものだった。親方は太平洋戦争で負傷した元兵士で、亡くなった戦友のためにぜひ寄付したいという申し出を受けたのだった。慰霊碑の立つ深くえぐれた断崖には波が打ち寄せ、ドドーンと鈍く音をあげていた。恐ろしいほど明るい南の太陽のもとに、透明な青い海が輝やいていた。あたりはあまりにも美しく、光にみちている。激戦の終わったあとで、この場所から米軍の制止もむなしく、数千人の婦女子が身を投げたとは、とても信じがたい。しかし、それは事実なのだった。

戦後三十二年の歳月はサイパン島にも世代の交代をもたらし、アメリカ化した若い人々の発言力が力を得てきている。日本の教育を受けた旧世代の後退とともに、これまでの素朴な親日の雰囲気は変わっていきそうだ。この二、三年で島民の対日感情は、確かにゆれ動き始めている。

変わりゆくサイパン島に別れの長い汽笛を残して「にっぽん丸」は一路、横浜へ向けて帰路についた。五日目の早朝、サンデッキに出ると房総半島の緑濃い山波が真近に迫っていた。

櫂書房（かいしょぼう）

妻遊記

闘うおんなはやさしいおんな

おんなのことは天下国家のことなのだ

内出倭子著
生まれっぱなしの中年娘、悟空をきどって珍道中。如意棒がわりの〈健啖〉ぶり、度胸を決めての珍問珍答。あゝエキゾチック漫遊記。
B6判　256頁　並製本　定価880円

吉武輝子著
社会の荒波に揉まれて闘う女を「男まさり」と人は言う。そんなおんなの奥にゆれている「真のやさしさ」を誰が知ろう……。
B6判　254頁　並製本　定価780円

吉武輝子著
女と男――この二つしかない社会で、分業ではなく「共業」を、と叫び続け、自ら「体で理解できる」女のひとりとして先頭に立つ訳は!?
B6判　226頁　並製本　定価780円

■近刊
松本路子写真集

東京都渋谷区東1の4の1.
TEL.(406)6151　振替東京 3-84473

おしゃべり

エンピツとハガキ
それだけで書ける
コーナー

二ヶ月に一度はペンを

坂戸市　高橋　裕見子

「わいふ」一四五号を開くと、『年間予約が切れますので…』というお手紙がはいっていました。六冊の「わいふ」をテーブルの上に並べて、私が感じたことは、私は書いて読む会員ではなく、読むだけの会員になってしまっている、ということでした。

「わいふ」は、あらゆる生活をし、あらゆる考え方をもつ、あらゆる主婦が、「書く」ことによって成り立っているというのに。二ヶ月にたった一回ペンを持つことができなくて、他の何ができるというのだろうか。書かなかったことを反省しています。

私も、一四五号の早乙女光子さんのように育児と自分の「やりたい事」の狭間でオタオタと生きている一人です。だから、「母性だけに徹しきれない…」という早乙女さんに、何かを書かなくてはと思ってペンを執ったのですが、気持がうまく言葉にならず、茨木のり子詩集（思潮社刊）から、「ぎらりと光るダイヤのような日」という詩の一部を書くことにします。

「……小さな赤ん坊が生まれたりすると／考えたりもっと違った自分になりたい／欲望などはもはや贅沢品になってしまう／世界に別れを告げる日に／ひとは一生をふりかえって／自分が本当に生きた日が／あまりにすくなかったことに驚くだろう／……」

生き方を交換しよう

仙台市　岩田　真砂子

「わいふ」を読んで、とても揺さぶられました。こんなに私の知らない事実があったのか、と思いました。皆様のご意見は胸に迫るものばかり。

きれいごと？　そうでしょうか。生まなましさに欠ける？　そうでしょうか。とても悲しくなりますね。私が感傷的過ぎるのか、それとも傲慢なのか。おそらく後者でしょう。

しかし、断じて有閑マダムのお遊び的投稿はすまいと、心に誓ってだけはいきたいと思います。経験浅き私の見方から、「わいふ」の読者の方々はそれぞれ各人各様違った何かを求めていらっしゃるということが分るから。

「おしゃべり」のコーナーは、その点、実に明確にそれを表わしているようで、とても好感がもてます。もっと固くならずに、開放的な気持をもって、自由にこのコーナーを生かしていこうではありませんか。

どうぞ、このまま

茨城県　K・N

〝おしゃべり〟のコーナーで、いろいろの注文がありますが、どうぞいつまでも「わいふ」は他の雑誌にはない今のままでいて下さい。〝嫁と姑の問題〟とか、それは他の雑誌でもたくさん記されており、私はこうした身の上相談的なものは好きではありません。

「悩みは自分の力で解く」という信念の故です。

どうか、現在の美しい「わいふ」のシルエットを消さないで下さいますように。

一四四号を読んで

兵庫県　白沢　由美子

一四四号の特集〝なぜ結婚するのか〟を興味深く読みました。

どちらかというと、結婚の哲学を受身的に受取っておられる方が多いようです。なんとなく犠牲的精神がただよって……。しかしながら、私はそこに、誰にも共通して、結婚に対し、そこはかとなく〝あこがれ〟的な精神が流れていることを読みとりました。(まちがっていたらすみません)

人間は本来、男も女も、本能的に結婚にあこがれるのではなかろうか。なぜ……とかいう、しんきくさい理由などなしに。幸か不幸か、人間の脳の異常発達は、結婚という人間のより本能的な部分に根ざしたものまでも、人間社会のしがらみの中に閉じ込めてしまった気がします。

そこで、敢えて結婚する理由を求めるなら、そこには人間のより本能的な部分に根ざした男と女の世界があるから。そこでは、男と女はあくまで対等に向い合える気がするのです。

子どもから一歩はなれて

名古屋市　鈴木　ひと美

早乙女さんの投稿に深く心を動かされました。本当に子供は生身の人間です。感情があります。だからおろそかにはできないのです。子どもを育てるのに、適不適があるということ。私も時々そう思います。不適格の母親に育てられる子どもは問題も一層起りやすい。そこでまた一段と悩み、悪循環をくり返すことになるのではないでしょうか。私はべったり母さんでなく、一歩はずれた母さんとして、子どもを見守っていきたい、と心がけています。お仲間の多いこと心強く思いました。

投稿雑感

枚方市　板倉　さち子

表には住所とアテ名を書き、裏に自分の名前をしたためて封をする。封をするといってもその間合はその都度違っていておもしろいものです。すぐに封をしてしまうのはたとえポストに入れるのが二、三日遅れても、私にはもう投函したようなもので、このごろはやりの薄紙をはいでペタンと押す式の封筒でも、何故かそれがためらわれるのは、私の思い切りの悪さというより自信のなさ、それに自己嫌悪、いささかの満足が交錯して「さて、どちらにしようかな……?」などとまた迷ってしまうのです。だいぶ推敲したつもりのものでも日が経って読み返してみると、なんのことはないなんとも下手くそな、たどたどしい文章でがっかりしてしまいます。それなのにいっそ破り捨てるには惜しく、苦労したものほどその出来とは関係なく愛着もあって反古にはしにくい。

一体ものを書くということは、自分の素肌を他人の前にさらすことに他ないようです。素肌の自分をそのまま出してしまうのですから恥しいことに違いないのですが、そこにはなんとない自己顕示欲みたいなものがくすぶ

っていて、今度は、今度こそと――自分なりに手応えを期待して――書きたいと思っているのです。

そういうわけでこの原稿のように、幾分の迷いの後、えい！とばかり気合いと共に封をし、（実際にはまだしてない）緘をした時の気持は、頼りない子を世の大海に放り出した時のような、また後は野となれ山となれ、といったやけっぱちな気分になっていることだけは確かです。

私の横顔

目黒区　亀山　和枝

お送りいただきましたバックナンバー拝見させていただきました。〃わいふ〃の育ちつつある波が感じられ、また投稿者の年代の巾が広いこともうれしく思われました。私、卒業の年に結婚、それにともなう転居によって失業、そこで大学院へと大学院聴講生となる一方受験準備をしている間に子持ちとなり断念、今に至っております。「いつの日か――」の思いはございますが、五才男子と五ヶ月の女子の母が今の私のレッテルでございます。せめて相対化される場をと、お仲間に加えていただきたく存じます。

叱られない確信

A・H

初めて葉書で申し込みました時には住所を〃12番13号N方としました。これは主人にムダ使いだと反対されるのを恐れてでしたが、雑誌が届いたのを手にしましてこれなら叱られないと確信します。本住所へ郵送お願いします。

やもめですけれど…

横浜市　芹田　富美子

〃わいふ〃と云うよりは〃やもめ〃なのですが……如何なものでしょう。

八年前、自宅の前で車にはねられて即死した主人のため、二ヶ月も涙を惜しまなかった私なのに、今はそれも思い出の一コマに過ぎないのです。職業は其の時を境に一変して、細々と（自分がやせているので）アパート経営です。

其の頃三人の子等、皆学生だったのに今、長女は嫁して孫二人、長男は妻帯して、私と母と次男と同居、その次男さえも今春からサラリーマンなのです。夢中で過ごした八年はぼーっとかすんでしまいました。御親切な方も多く種々お世話にもなりましたし、迫害にも種々会いまして苦労もしましたけれど、今それらを大体卒業？しかけて見ると、さて何かやるには如何にも午後と云う感じだし、ボランティア活動をしようと思えば、娘に〃丈夫でもないのに〃と叱られるし、そこで皆さんの御声を拝読するのに限るとお仲間入りをお願いしたいのです。

ためらいを乗りこえて

刈谷市　原　真智子

お仲間に加えて戴きましてから一年になろうとしております。

書きたい書きたいと思いながら、実は〃原則としてすべて掲載する〃というのがいささか怖しくて今日に至りました。普通の投稿ですと没になってもいいや、と思うわけですが〃わいふ〃にはそれがありません。とすると、編集者の見識に責を負わせることは全くできず、一切筆者の肩にかかってくることになります。新聞などに投書するより格段の覚悟が必要な気がします。私にその覚悟ができたのかと問われれば、怪しいものなのですが、言いたさの度合がそれを越えたということになりましょうか。

未熟にはそれなりの意義がある。と一人で理屈をつけて別紙、お目にかけます。立入ったことを話し合う友だちがありませんので、貴誌の来る日が楽しみです。

男らしさとは？

千葉市　長田　綾子

本当の男らしさとは、女をリードし、そして弱い者を守ることを云うのだろう。

封建思想を唱える男性達は、外面では男の利害や尺度で女をリードし（それは女を守る思想ではなくて）、しかも家の内部では、亭主関白という名目のもとに、わがまま一杯、子供みたいに一方的に甘えてくる。つまり、女が男を尊敬できるというスタイルではなく、女の人間性を無視した思想にすぎない。

経済力を持たない女の人間性が認められない思想だ。強者が弱者を守るのが、美徳のはずなのに、封建思想とは、強者が弱者を喰いつくすという弱肉強食思想であり、獣の思想と変らない。

その点を恥ずかしいと感じない男達と、おかしいと気付かない女達は、問題である。

一四六号の結論

大田区　斉藤　芳枝

「日本人の母」の萩原元昭さんの

「母が自らの人生を生きることを身をもって子に示すようになった時、《罪の意識としての母》も子の心の中から姿を消し、日本の親子関係は大きく変化するでしょう。その時には日本人そのものの精神構造、ひいては日本の文化の質も変ってくるに違いありません。」

一四六号の結論的な言葉であり、日本の母の革命的感覚と思いました。

「母が自らの人生を生きることを身を以て子に示す」ということに目覚めた母も少しは出てきましたが、それでも子に対しては《罪の意識としての母》になってしまう場合もあります。真に目覚めることは非常にたいへんなことだと思います。けれど今の日本の社会文化の悲しさを見るとどうしても母という根本から目覚め変ってほしいと思います。

何かを見つけたい

相模原市　長田　和子

私が貴誌の存在を知りましたのは、四月二十七日付の日経新聞紙上で、たしかニューライフ特集というような記事でだったと思います。その時「強める連帯　手作りの雑誌に取り組む四十代」として紹介されておりました。

何というすばらしい雑誌があったのでしょう。と感激してすぐに申し込んだのではありません。行動してから考える型のおっちょこちょいな私です。いつもそれで失敗ばかり。本当に私にこの雑誌が必要なのだろうか。ちょっと考えてみました。そして一月ばかり放っぽり出しておきました。その間いつも心のどこかに「わいふ」のことがひっかかっていました。これが出会いなのではないだろうか。そして震える指でダイヤルを回しました。

（三文小説じみてきました）

では読ませていただいた結果は。

何かとてもピッタリくるものがありました。

経験主義者である私は、体験を通して書かれた生の声に大きなショックを受けたようです。〝育自〟までいくかどうかわかりませんが、怠惰な私でも変わっていけるような気がしてまいりました。

そして又、多くの方が何かをしたいと思っていらっしゃるのをみて、とても勇気づけられる思いです。戦後の混乱から何かを打ち建てようとしてやっと明りが見えて来た時代に生れ育った私たちこそ、明日に希望をもって何かができる最後の世代なのではないでしょうか。この雑誌から、その何かをぜひ見つけたいと思います。

〈わいふ〉147号　1977年7月25日発行　定価350円・年間予約1500円・送料750円(6回分)
編集・発行・わいふ編集部　〒162 東京都新宿区加賀町2－3 田中喜美子方　☎269-2388・260-5500
印刷・㈱イワタ印刷　TEL(262)1070　★振替注文は東京5-110430わいふ編集部へ

編集だより

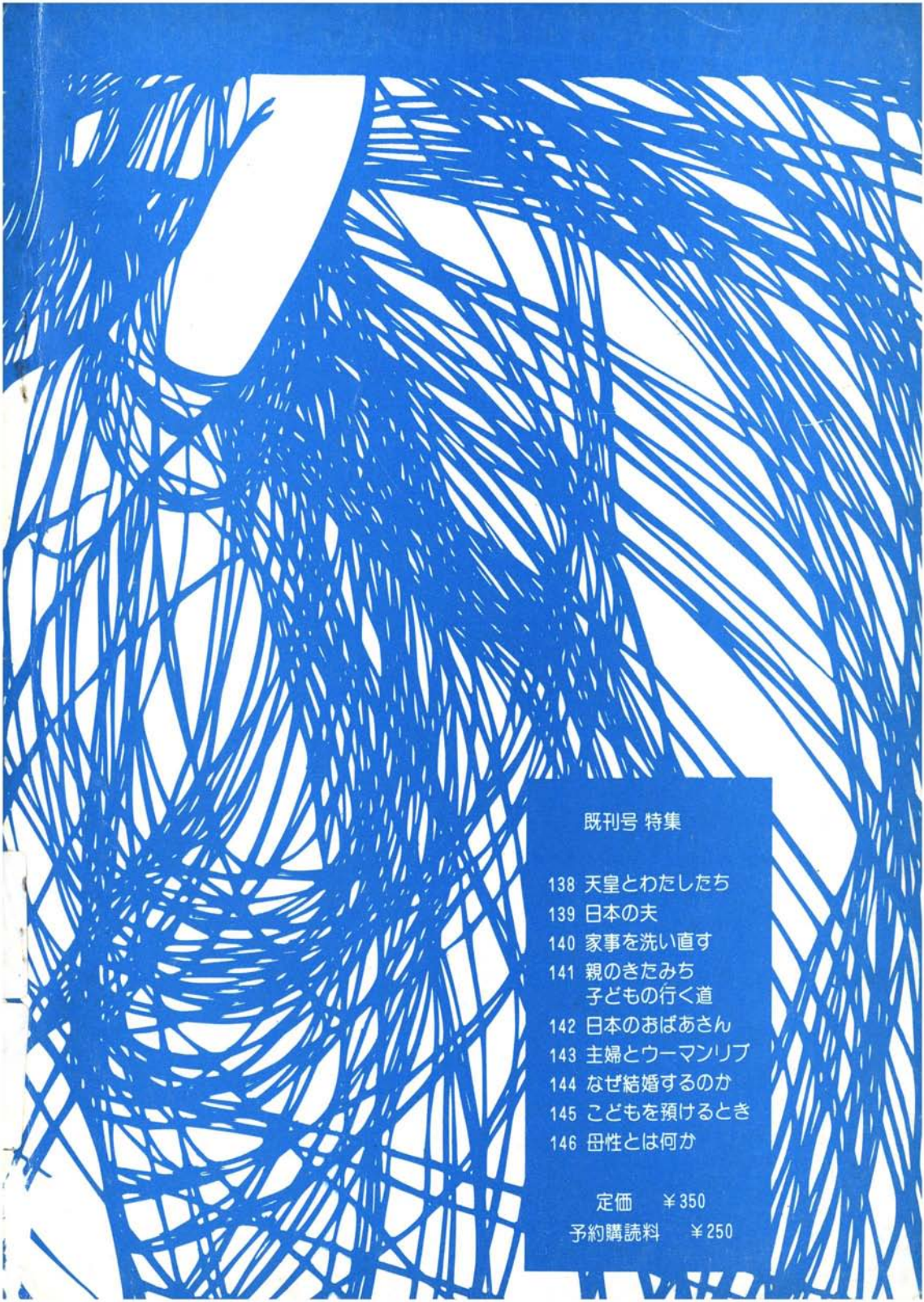
▼七月一日の公開編集会議の結果、投稿規定を多少手直し致しましたので、お読みいただきたいと存じます。書く人にとっても、読む人にとっても面白い「わいふ」を作るために、今後も試行錯誤が続きそうです。

▼主婦労働のねうち七十万という声がありますが「わいふ編集部」はどのような意見をお持ちでしょうか、と週刊朝日の記者と称する人から電話がかかってきました。主婦は職業ではないと思っていますからお金で換算することはムリだと思います。と答えましたが、皆さまはこの答で満足なさるかどうか。主婦問題とはつくづく難しいものですね。

▼〝生きています〟で御紹介した、民法七五〇条改正の請願書に署名なさりたい方は編集部まで御連絡下さい。

147号編集メンバー・小倉徳子・鈴木滋子・鈴木みち子・田中喜美子・内藤のぶ子・二宮やよひ・林慶子・福田悦子・和田好子

玉川高島屋S.Cに
JAXの特選中古車
ショールーム誕生!
玉川高島屋S.C　☎03-709-2222(大代表)
JAXカーコーナー　☎03-709-7739(直通)



既刊号 特集

138 天皇とわたしたち
139 日本の夫
140 家事を洗い直す
141 親のきたみち
子どもの行く道
142 日本のおばあさん
143 主婦とウーマンリブ
144 なぜ結婚するのか
145 こどもを預けるとき
146 母性とは何か

定価　￥350
予約購読料　￥250